

平塚らいてうの会ニュース

2018年の新しい課題

「平和」と「自然」の豊かな世界を

NPO法人平塚らいてうの会会長 米田佐代子

『平塚らいてうの会ニュース』は100号に

あたらしい年とともに、このニュースも1992年に前身の『平塚らいてうを記念する会ニュース』として発刊されて以来100号の節目を迎えました。会が記念碑建立や記録映画制作に協力し、2001年にNPO法人平塚らいてうの会になってから「らいてうの家」をオープンして多彩な活動に取り組んできた貴重な記録紙です。第1号から80号まではウィメンズ・アクション・ネットワーク(WAN)のミニコミ図書館に収録され、公開されていますのでご覧ください(van.or.jp)。

21世紀の希望はどこに？

21世紀が始まるとき、わたしたちは「戦争の20世紀を越えて、21世紀こそ平和を」と語り合いましたが、大国の利害による武力介入は今も止むことがありません。らいてう生涯のねがいであった「どの国も敵とせず、ただ戦争だけが敵」となる平和世界への希望はどこへ行ったのでしょうか。

けれどもらいてうは、どんなときにも失望せず、「ほんとうの平和をつくる」女性の力に希望を託

しました。戦時中迷い悩んだらいてうは、戦後深い反省とともに「かつて女性は無権利だったが今は主権者。こんど戦争になったら女性の責任」と自覚して、平和運動の先頭に立ったのです。

核兵器禁止条約採択にみる

「女性がつくる平和」の可能性

2017年7月、国連で核兵器禁止条約が採択されたとき、日本の被爆者をはじめ多くの女性が重要な役割を果たしました。推進役としてノーベル平和賞を受賞した「核兵器廃絶国際キャンペーン」(ICAN)参加団体の一つ「婦人国際平和自由連盟」(WILPF)は第一次大戦当時から活動、成瀬仁蔵によって日本にも紹介され、らいてうが影響を受けたジェーン・アダムズ(初代会長)は1931年ノーベル平和賞の受賞者です。「女性のイニシアティブ」は平和をつくるカギなのです。2月のらいてう講座にぜひご参加ください。(※)

「自然とともにある平和」を

太陽光発電問題の新展開

らいてうの家の太陽光発電問題は、わたしたちの運動で当初予定した昨年4月には着工できず、昨年11月2日の説明会では、事業者(HJアセツト・マネージメント社)の依頼を受けたアセス担

発行
平塚らいてうの会
〒112-0002
東京都文京区
小石川
5-10-20-5F
TEL・FAX
03-3818-8626



当の地域づくり工房が「この地の自然と歴史・文化を守ってきた関係者」に配慮して、「設置しない」代替案(ゼロ提案)を含む「中間評価書案」を提示、異例の展開となりました。しかしHJ社は「法的には可能」と強行の構えです。

地域づくり工房はこの

案に対する意見を公募、それをもとに公開の「ワークシヨップ」をおこなって「評価書」をまとめる予定です。すでに会としての意見とともに、多くの会員が意見を送りました。この「ゼロ提案」を手掛かりに、事業者とも地域の人びとも、行政とも話し合い、この地を「自然のいのちの営みを守る平和のひろば」として育てる途を拓きたい。今年は「白紙撤回」の正念場です。

「太陽光発電計画白紙撤回署名」は地元の自治会や県内のみならず、全国各地から続々届いています。1月以降「ゼロ提案」をめぐる、さらに事業者側と話し合う方向になったので、署名活動は続行します。引き続きご協力ください。(※)

※らいてう講座2018

2月3日(土) 午後2時 東京ウィメンズプラザ 講演「女性のつくる平和社会―核兵器禁止条約をめぐる―」川田忠明さん (別紙チラシ)

※署名 用紙は会のホームページから。郵送ご希望の方は会にファクス、メールでご連絡を。

祝100号 らいてうの会に深く関わってくださった方々に「ひとこと」お言葉を寄せていただきました。

伝えること

宮島満里子



伝えるという地味な営みが歴史を創出する。らいてうの会のニュースが全国に伝えられて、百号百歳である。「らいてうの家」がある。

ずまや高原に誕生して十年の歳月を経た。そこで素晴らしい先達方との出逢いがあり、自然の中で本音で語り合える時間を共有できたことは、最晩年に戴けた生涯の宝物である。

偶像のように仰いでいた「らいてうさん」が最も身近な存在として、上田の地に舞い降りたとは思えないほど、今は親しみをもって呼ぶことができる。図らずも「源氏物語」をこの家で語らせてもらうことになった。物語に登場する女たちの生き様のなかに込められた紫式部の内心を、お喋りできる願望が叶えられたのである。千年を経て今なお式部のメッセージが伝えられる、最高の環境をここは提供してくれる。まさに「らいてうの家」であるからと言いたい。

会の事業と活動は「事務局日誌」の欄を見ると着実な歩みが見えてくる。「平塚らいてうの会ニュース」が次の百号に続くよう切に祈っている。

らいてうさんにお会いしたかった！

日色ともゑ



「平塚らいてうの会ニュース」100号、おめでとうございます。

70年代のはじめごろ、新婦人しんぶんの依頼で「この道ひとすじに」という紙面を受けもったことがあります。無事終わった時、編集長から「一年間良い仕事をしてくれましたね」とらいてうさんが言ってくくださったと言葉をそえて、おどろきのプレゼントがありました。らいてうさんの色紙です。

その後は、ご縁があり「山本安英の勉強会」では「元始、女性は太陽であった」の朗読や櫛田ふきさんからは「憲法を守りぬく覚悟」を読んでも声をかけていただいたり、私はらいてうさんの文章で学ばせていただきました。あの時「らいてうさんにお会いしたい」と強く願ったら、実現したでしょうか……

皆さんの努力で100号が迎えられましたことは素晴らしいことと思っています。会員でいることを誇りに思っています。

新しい年にあたって

中島 邦

賀春 戦争への道を平和への道に

きりかえる年にしましょう



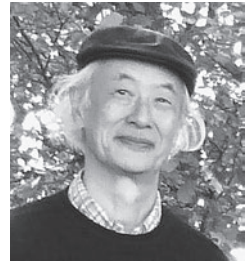
平塚らいてうは1966年元旦にあたって右のようなメッセージを送っている。他にも年賀状はいくつかみられるが、いずれも平和を希求する言葉が入っている。

50年余を経た今も未だに同様に主張せざるを得ない日本の現状がある。同時に世界への警告としても発せざるを得ないといえよう。

らいてうの戦後の発言や活動はその生涯を通して蓄積された結果に他ならない。日本女子大学の学生であった若き日に、創立者の成瀬仁蔵による人格教育の方針によって自らをみつめ、高めることに触発され、さらに禅に出合い見性を得た。見性とは他者によって承認されるものではなく、自らが確信するものであり在学中にそれは得られたとみたい。以来、禅を通じて自らをとぎすます事を自らに課してその時々社会に真摯に発言し行動を重ねてきている。それ故にらいてうの生涯は検討に価する魅力あるものといえよう。

平塚らいてうの思い

奥村直史



「自己本来の面目とは？」に込めて「草木や昆虫や鳥獸などと同じように、この宇宙に遍満して生きとし生けるものを生み育てている大きな『いのち』

の力によって、生み出された：生き通しのいのちである自分自身である」と1947年61歳のらいてうは記している。こうした自己認識、世界認識は、20歳の「見性」以来終世変わらなかった。

1911年25歳のらいてうは『青鞥』創刊号に「自己」の覚醒を訴えて以後、共同生活、出産、育児をはじめとした社会的体験を重ねる中で次々に発見し確認した思いを表明し世に問うてきた。「母性」を尊重し、「軍縮・平和」を希求し、「世界民」「宇宙民」たらんとし、「相互扶助」社会の建設を目指したのである。

「平塚らいてうの会・らいてうの家」では、らいてうの提起した思いを確認し、その思想を学ぶとともに、母子を含め人びとが集い交流する場を作ってきた。今日「らいてうの家」に集う者を根本で支える『自然・いのち』がメガソーラーによって浸食されようとしている。らいてうが描いた自然観、世界観に学ぼうとするかぎり、当然反対せざるを得ない。

我々の活動を支えてくれる会報が100号以後も十分に力を発揮することを願っております。

講談・平塚らいてう

宝井琴桜



連続講談となった。

大衆演芸である講談で、平塚らいてうを取り上げたのは、らいてう没後20年の1991年のこと。とても一席では語りつくせず結局、6年半かけて19作の

初回のプログラムには「らいてう」を語り大きく豊かな女性に成長したい、これは私のライフワークですと書いた。以来、機会あるごとに語ってきたがどうしてもドラマチックな前半生に偏りがちになっている。塩原心中未遂事件や『青鞥』誕生は講談の話芸で語りやすいということもある。内面の思想を物語で話すのはとても難しい。そこを何とか突き詰めてみたい又、らいてうを通じて憲法や平和を訴えたいと思って去年から又、連続で取り組むこととした。

年に3回程度の「かぶら矢会」。国立演芸場で催されるこの会は、気のあう仲間6人の勉強会で女は私一人。お客様も圧倒的に男性が多い。らいてうと言っても初めて聞くという人もいる。そういう場で受け入れてもらえるのか不安もあったが、今では「続きが楽しみです」と言ってくださる男性もでてきた。19作全部は無理だが凝縮させて続けてみようと思っている。

「平塚らいてうの会ニュース」を頼りにして。講談「かぶら矢会」3月27日・7月9日
問い合わせは 03・3915・4753（琴調）

100号に寄せて

野末悦子



「平塚らいてうの会ニュース100号」おめでとうございます。

「元始、女性は大陽であった」で始まる『青鞥』の創刊のフレーズに大感

激した私でした。昭和になって生を受けた私にとって、明治から大正そして戦争に突入してしまつた昭和の変遷の中で先人のことをもっと知りたいと、らいてうの著書を探し求め、川崎市立の図書館で4冊の自伝に巡り合うことができました。

『わたくしの歩いた道』昭和30年3月5日新評論社刊と『元始、女性は大陽であった 下巻』1971年9月6日大月書店刊、『続 元始、女性は大陽であった』1972年11月4日大月書店刊、『元始、女性は大陽であった』（完結編）1973年1月16日発行でした。ということとは下巻の前のもう一冊が貸し出し中で今回は手にすることが出来なかったわけです。その時期の内容はおそらく新評論社刊の前半に書かれてあることで理解できるのではと思われました。またの日に図書館を訪れるときに巡り合えると思います。その時期は、彼女が禅の修行に没頭していた時期と思われる。

戦後の高揚期の活躍の中に櫛田ふきさんのお顔が見られたのも、身近に感じられて嬉しく存じました。新しい憲法への喜びが強く表されていたのも、心強いことでした。

ニュース100号記念

これまでの活動を振り返って

11月16日、長く事務局長をつとめてこられた小林明子さんと、創立当初から会に深く関わっている折井美耶子副会長に、これまでの会の活動について語っていただきました。

「平塚らいてうをしのぶ展」と碑の建立

折井 1971年5月にらいてうが亡くなり、翌年、「平塚らいてうをしのぶ展」が神戸、大阪、京都で行われました。86年に東京の日仏会館で行



創刊当時のニュースを前にして、小林明子さん（左）と折井美耶子さん

われた「らいてう生誕100年祭」には全国から集まり、会場からあふれるほどでした。長岡輝子さんが詩「新しい女」を朗読、大岡昇平さんと丸岡秀子さんが講演され、印象深いものでした。

91年には「没後20年・『青鞥』創刊80年記念のつどい」が千代田公会堂で開催され、その後、「平塚らいてうを記念する会」が発足したのです。

小林 「記念する会」の設立総会は92年5月に損保会館で行われました。100人が集まり、会長は櫛田ふきさん、事務局長は立松隆子さんでした。
折井 立松さんと静岡で行われた日本母親大会

で、らいてうのうちわを売って資金を集めたことを覚えています。

『婦民新聞』の編集をしていた塩谷満枝さんが、長いこと会のニュースを担当してくれました。写真も撮り、読ませる記事も書く名編集長でした。ね。事務局長は白井雅子さんが婦団連と兼務でつとめてくれました。

折井 奥村家の知り合いが茅ヶ崎にいて「茅ヶ崎らいてうの会」や市議や地元の方々とは協働しながら市立高砂緑地公園に碑を立てました。碑は、南湖院に行く途中にあります。櫛田さん、小林登美枝さんと何度も茅ヶ崎に通い、石も探しました。

98年5月23日に碑が建立され、瀬戸内寂聴さん、宝井琴桜さん、築添正生さんも来てくれました。の曾孫の奥村ともさんが除幕をしました。

小林 2000年に「記念する会」から「NPO平塚らいてうの会」に名称変更し、設立総会で会長は櫛田ふきさん、私は事務局長になりました。

「平塚らいてうの記録映画をつくる会」始動

折井 櫛田さんの白寿の会（1998年）には岩波ホールの高野悦子さん、映画監督の山田洋次さんがいらしてくれました。櫛田さんが「らいてうの映像が欲しい」と言うので山田さんが「映画に決まってる」と。そこで「羽田澄子さんにやってもらおう」という高野さんの一声で決まったのです。

羽田さんは映画を撮る決意をすると「内容は一任してください」と言われ、私たちはお金集めに奔走しました。「平塚らいてうの記録映画をつくる会」は、「らいてうの会」と日本女子大の「平塚らいてう研究会」と「らいてう研究会」が中心

となりました。

小林 ここから日本女子大との関わりが深くなっていききましたね。記録映画が完成すると2002年に岩波ホールでロードショー、長野県をスタートに全国で上映運動が始まりました。真田だけでチケットが600枚売れたのには驚きました。

折井 各地で上映運動を行って黒字になり、そのお金が「らいてう賞」と「らいてうの家」の基金となりました。

信州真田に「らいてうの家」を建てる

折井 らいてうが買い求めた長野県の土地を奥村家が下さるというので、1996年に土地を見に菅平のペンションの人の案内で、登美枝さんと数人で行きましたが、土地の状況がよくわかませんでした。らいてうの遺品は関西の「働く婦人の家」が預かっていました。

小林 2000年6月らいてう忌で、あずまや高原にバス旅行に行き、家が建つ場所を参加者で見ました。それが『信濃毎日新聞』に載り地元の方々はいいよ家が建つと実感したそうです。

土地をいただくにはNPOにしなくてはならないので、同年9月の臨時総会から作業を始め、定款案をもって東京都に申請すると、個人をたたえる会は駄目と。臨時総会を開いて名称変更し認可される前に櫛田さんが亡くなってしまいました。

再度臨時総会を開き、小林登美枝さんが会長になり、2001年6月にやっと認証書が届きました。

折井 不動産をもつのは大変なことですが。2004年に登美枝さんが亡くなってから1年間は会長不在で、その後、米田佐代子さんが会長に

なりましたが、事務局長の小林明子さんの尽力は本当に大きいです。

小林 土地問題が落ち着くと、家を建てるための「プロジェクト会議」をつくりました。地元的设计者「女性九人衆」と中央設計の永橋為成さんに相談し、全国から寄せられた「提案カード」も参考にしながらいきましました。2003年末、全国に訴えるための呼びかけ人をお願いを出すことになったのですが、登美枝さんはホスピスに入っていて、暮れに書いた文章が絶筆となりました。登美枝さんはさぞ心残りだったでしょう。

折井 木造で、しかも長野県産の地元材を使い、家具も全部木で作っていただきました。大黒柱は真田町傍陽の木です。デザインをお願いした小田原健さんに様々な意見を言って、展示ケースも木造にしてもらったことには本当に感謝しています。

小林 家建設の募金は目標の5000万円を超えました。山崎一彦さんがステンドグラスを作成してくれました。2つのペレットストーブは、寄贈してもらったものです。長野県産の木を使ったお返しに植林もしました。庭を広げてチップをまいて踏み固めて歩けるようになりました。

折井 笹狩りをしたら白樺の木が出てきたのには驚きましたね。それまでは身の丈ほどのクマザサに覆われて見えなかったのです。

2014年にはスウェーデンに「エレン・ケイの足跡を訪ねる旅」に行きました。25人が参加し、エレン・ケイ記念館とらいてうの家は姉妹館となりました。ストックホルムにエレン・ケイ公園があり彼女の銅像があります。現地の高見さん

にガイドしてもらったのも、とても良かったです。これからの課題——後継者をどう育てるか

小林 NPOになって16年、家ができて11年が経ち、これからも地域と一緒に活動を続けていきたいですね。課題は後継者をどう育てていくかです。（聞き手・金輪きみ子 文・飯村しのぶ）

森のめぐみ講座Ⅱ 2017・10月1、2日

1日目 笹狩りは、1年ぶり2回目の参加です。今回は、らいてうの家の前庭で昼食準備組と笹刈り組との顔合わせから始まりました。身支度を整えて、らいてうの森に歩いて行きました。草刈り鎌で、熊笹を刈って行くのは、なかなか骨が折れますが、木に囲まれての作業は、楽しくもあります。大きく育って、トゲがいっぱいになったウドやタラとも格闘していい汗をかきました。

前回と比べ、植樹した木々が随分大きくなっています。一部は密集して育っていました。実験的に間隔を空けずに植樹したところだそうです。もうすぐ、本当に「らいてうの森」が出来上がるということを実感しました。



お昼は、きのこの炊き込みご飯、きのこの汁、炭火で焼いた天然イワナ、地元の方が持ち寄ってくださった

煮物や漬物がいっぱい。おしゃべりしながら美味しくいただきました。

午後は、鹿よけの薬を塗り終えた後、一面にベニバナイチャクソウがピンク色の花をつける場所や、朝鮮五味子の赤い実のあるところを散策しました。ミヤマリンドウも可愛く咲いてました。

2日目 露天風呂からの素晴らしい朝焼けに、背中を押されて、早朝6時半から、散歩に出かけました。ふかふかの森の散歩道を1時間歩きまわりました。朝鮮五味子を見つけては、収穫。一粒食べてみると、本当に甘い、辛い、苦い、酸っぱい、しよっぱいの5つの味が口に広がりました。焼酎につけると綺麗な赤いお酒が出来上がります。

9時から、自然観察指導員の西牧さんと森に入りました。はじめは全く見つけられなかったのに、目が慣れてくると落ち葉の間にひっそり隠れているきのこが目がいくようになってきました。クリフウセンダケ、ナラダケ、ハナイグチダケを袋いっぱい採取することができました。圧巻は、ミズナラの大木にびっしりくっついていたマスタケでした。魚のサクラマスに色がそっくりだということのきのこも採取しました。大収穫の1日でした。東京に帰ってから、塩水で汚れを落としたり、ピカピカに綺麗になり、思わず絵を描きました。そして、佃煮、きのこの汁、湯豆腐の付け合わせにしました。マスタケは、バター焼きが合うという話でしたが、野菜や、豆と一緒に洋風スープにしました。角切りのハムのものでした。秋の森のめぐみ、ごちそうさまでした！（北澤有希子）

「中西悟堂とその仲間たち」展にらいてう登場



金沢市の金沢ふるさと偉人館で2017年4月22日から8月27日まで「中西悟堂とその仲間たち」展が開催されました。金沢は中西悟堂生誕の地であり、中西悟堂に関する多くの資料が所蔵されています。なかなか都合がつかず、最終日に何とか日帰りで訪れることができました。展示コーナーに入ると正面のメ

インスペースに、らいてうと悟堂さんが二人で本を見る写真が大きく展示されているのにまず驚きました。

中西悟堂（1895～1984）は、禅僧、詩人であり、1934年（昭和9年）に日本野鳥の会を設立し、戦前戦後を通して自然保護の運動に力を尽くし「自然」（じねん）を追求する思想家でした。今回の展示には、らいてうの他に柳田国男、斎藤茂吉、水原秋櫻子、佐藤春夫等々の著名な50人の文化人が紹介されましたが、らいてうが大きく展示されているのを目の当たりにして、二人の同志的なつながりの深さを改めて思ったことでした。新たに発見されたらいてうの手紙も展示されていて今後の調査をお願いし帰途につきました。

（三留弥生）

「命短し 恋せよ乙女」展17・7／159／24

弥生美術館（東京都文京区弥生町）のチラシに「カリスマ女優・松井須磨子の後追い自殺、世界的な物理学者を誘惑、失墜させたと言われた原阿佐緒」などありますが、大正時代は世の中を賑わせた恋愛事件が多かったのでしょうか。弥生美術館に行ってきました。

「らいてう」をどのように取り上げているのかと興味津々。入ってすぐ左側にかんりのスペースをとって、らいてうと奥村博史の出会い、愛を育み、そして子育ての時代、らいてうの手紙や当時の雑誌などが展示してありました。今までにない企画で、与謝野晶子と鉄幹、柳原白蓮と宮崎竜介、長沼智恵子と高村光太郎など、一味変わった興味を引く企画で、女性にとって明治の重苦しさを通り抜けた、明るさと新しさと自立を感じさせる大正時代が展示してありました。

先日NHKのEテレ「グレーテルのかまど」で「平塚らいてうのゴマじるこ」という番組がありました。ご覧になりましたか？

博史とらいてうの愛のゴマじるこ、「オニキスのように黒く艶やかなとっておきのスイーツ、ゴマじるこ」の作り方を丁寧に解説していました。「ゴマじるこの作り方」は『美しい暮しの手帖』（第4号 1949年7月）に掲載されています。

昨年、習志野で平塚らいてうに関する講座があり、裏方で男性メンバー数人が美味しいゴマじるこをつくり、参加者みんなにふるまってくれました。おいしい講座もいいですね。

（井上美穂子）

【事務局日誌】

9月26日 地域づくり工房と意見交換会（於らいてうの家）

10月1日 森のめぐみ講座Ⅱ「らいてうの森」の笹刈り、鹿よけの薬を塗布

10月2日 秋の恵みにふれて 秋の恵み採取

10月5日 ブックレット編集会議

10月12日 らいてうの会ニュース拡大編集会議

10月15日 らいてう講座Ⅳ むかしがたり

「上田市の赤ちゃん政策」講師・太安ヒデ子さん（於らいてうの家）

10月20日 「木村康子さんをしのぶ会」参加（於エデュカス東京）

10月24日 HJアセット社から4人来局

11月2日 太陽光発電所住民説明会参加（於上田駅前ビル パレオ）

11月6日 グレーテルのかまど「平塚らいてうのゴマじるこ」Eテレ放映

11月7・8日 「らいてうの家」大掃除・反省会

11月9日 展示収納作業 「家」閉館

11月14日 ブックレット編集会議

第4回理事会

11月16日 折井美耶子さん、小林明子さんへ

100号ニュースの為インタビュー

12月12日 ブックレット編集会議

第3回常任理事会

今年（2／26）のスノーシューは、菅平高原を歩きます。詳しくは事務局へお問い合わせください。



森のめぐみ講座・スノーシュー
菅平高原一本松の前で

核兵器禁止条約と「女性のイニシアチブ」
 昨年は、国連で核兵器禁止条約が採択されると
 いう大きな進展があ
 り、そこで、日本の
 被爆者をはじめ、女
 性が重要な役割を果
 たしました。国連の
 舞台に並んだ国際政
 治家たちも、推進役
 としてノーベル平和
 賞を受賞した「核兵

この1年、北朝鮮の核・ミサイル問題、その脅威すら「利用」した安倍政権の改憲への動きがすすめられてきました。最近の南北融和、米朝直接対話への動きは、朝鮮半島の緊張緩和への一歩となる可能性を期待させます。今こそ、らいてうの「ただ戦争だけが敵」という思いをもとに、対話による平和解決を求め、9条改憲を断念させて日本が平和外交に踏み出すための運動を強めるときでしょう。

◎総会で語り合いました
 らいてうのこころざしを今に生かす
 会と「家」の活動

おぼろけの会ニュース

発行
 平塚らいてうの会
 〒112-0002
 東京都文京区
 小石川
 5-10-20-5F
 TEL・FAX
 03-3818-8626

器廃絶国際キャンペーン（ICAN）の担い手も、多くが女性。「女性のイニシアチブ」は平和をつくるカギだということを、2月のらいてう講座「女性がつくる平和社会―核兵器禁止条約を中心に」の講師・川田忠明さんは事実をもって明らかにされました。

太陽光発電問題は正念場

今期、会が真正面から取り組んできたのが、らいてうの家の前の太陽光発電問題です。事業者はいまだに着工できず、アセス担当者が「設置しない」代替案（ゼロ提案）を含む「中間評価書案」を示すという異例の展開は、私たちの運動の成果です。事業者とも地域の人びとも行政とも話し合い、計画を白紙撤回させて、この地を「自然のいのちの営みを守る平和のひろば」として育てることができるとか、まさに正念場の年です。

学習・研究と家の維持管理―会の活性化を

前年の記念事業の続きとして、「らいてう」ブックレットや「家」紹介のDVDの作成、らいてう資料の保存などにとりくんできました。「家」の企画展示、らいてう講座や森のめぐみ講座、スノーシュー体験なども実施し、『紀要』10号も発行しました。こうした活動をさらに継続・発展さ

せていきましょう。今年のらいてう忌は、改憲の動きと家族・国家についての講演会です（左記）。「家」は13年目を迎え、改修・修繕や備品の更新などが増えています。今後の維持管理について真剣に検討し、問題点を明らかにして解決すべき時に来ています。新しい力で会の活性化を図り、もつともつと多くの方にはらいてうのこと、このころざしを伝えていくにはどうすればよいか、総会で語り合いました。

第19回通常総会と学習会のご案内

日時 2018年5月27日（日）13時開会
 会場 東京ウイメンズプラザ 第1会議室
 議題 ①17年度事業報告と決算報告
 ②18年度事業計画（案）と予算（案）
 ③新役員選出 ④その他

学習会・14時30分 同会場

「地域・風土に見合う自然エネルギーとは」（仮）

らいてうの家オープン

4月28日（土）10時45分から

合唱団「はーもーにー」春のお茶席

らいてう忌・講演会

6月10日（日）14時～16時30分

演題 「改憲の動きと家族・国家」

講師 山口智美さん（モンタナ州立大学准教授）

会場 東京ウイメンズプラザ 視聴覚室

森のめぐみ講座 7月16日（月）17日（火）

らいてうの森で笹刈り・蚕都上田めぐり

らいてう講座

女性がつくる平和社会――

核兵器禁止条約を中心に
川田忠明さん（日本平和委員会常任理事）

2月3日、東京ウイメンズプラザで「らいてう講座」が開催されました。

昨年国連で採択された核兵器禁止条約の交渉会議に参加された川田忠明さんをお招きし、約40人が参加しました。講演の要旨（抜粋）を紹介します。

核兵器禁止条約はなぜ歴史的なのか

条約は、核兵器を禁止すると多数決で決めたことが画期的です。国際政治で民主主義が勝利したと言えます。市民社会の役割も大きく、被爆者や世界の反核平和の動きがあつて実現しました。

昨年、ICAN（核兵器廃絶国際キャンペーン）がノーベル平和賞を受賞しました。中満泉国連軍縮担当上級代表が述べたように市民社会が世論をつくり、核兵器という大きな問題が動いたのです。被団協の代表理事の坪井直さんは「決してあきらめず続けていくこと。それができるのが名もなき市民であり、そういう人たちが世界を動かす」と言いました。被爆者の方、署名運動や6・9行動などに取り組んできた全ての方々に贈られた賞です。

国連会議をリードした女性たち

国連会議をリードしたのは女性たちでした。数

が多いだけでなくエレン・ホワイ特議長はじめ女性たちが果たした役割は素晴らしいものでした。条約には核兵器と女性の問題についても明記されています。

「核兵器の破滅的な結果は……人類の生存、環境、社会経済的發展、世界経済、食糧安全保障、現在および将来世代の健康に重大な影響を与え、また電離放射線がもたらす結果と相まって女性と少女に不均衡な影響を与える」

国際社会は、20世紀末頃から戦争が女性にもたらす影響の大きさを認識するようになりました。性奴隷、強制売春、強いられた妊娠の継続、その他あらゆる形態の性的暴力が戦争犯罪であるとしています。そういう認識で日本は「慰安婦」問題について対処すべきだと思います。

核軍縮交渉への女性参加の意義

核兵器禁止条約には男性と女性双方の参加を強調した上で「女性の核軍縮への効果的な参加を支援することを約束」と書かれています。

2000年に採択された安保理決議1325では「あらゆる意思決定レベルに女性の参加が増えること」「平和維持活動にジェンダーの視点を取り入れる」「ジェンダーに基づく暴力……から女性と少女を保護する」としています。

北朝鮮の問題――対話と交渉が唯一の道

2015年の安保法制（戦争法）により自衛隊法が改正されました。戦略爆撃機が北朝鮮の攻撃を受けたら、自衛隊は自動的に巻き込まれることになりま。国会も国民も知らない間に、戦争に巻き込まれる危険があるのです。

核による「抑止力」は役に立ちません。対話と交渉が唯一の道です。トランプ大統領は対話を否定していませんし、金正恩は今年の元旦に「北南関係改善の問題を真摯に議論し果敢に切り開くべき」と演説しました。無条件で直接対話し先制攻撃しないと確認するだけで、状況は変わります。

平和創造における女性の役割

「生命を生み出す母親は生命を育て生命を守ることをのぞみます」という日本母親大会の言葉通り、平和創造における女性の強さ、役割の大きさを感じます。

戦争法反対の時、「ママの会」が立ち上がりました。洗濯物を干しながらデモに行けるか考える。集会に参加しながら子どものお迎えを誰に頼むか考える。頭だけでなく心のなかで平和のために力を尽くすことが一つになっているところに女性の強さがあると思うのです。

壮大な構えで巨体な地殻変動を

野党共闘を力に政府に迫り共通政策に禁止条約参加を入れることが大事です。日本がアメリカの核兵器の傘に頼ることは核使用を認めることになります。被爆国日本は核兵器の非人道性を知っていると、国内外で発信していく必要があります。

今取り組んでいる3000万署名は5月までの短距離型、「安倍の9条改憲」反対1点で共闘して広げるものです。ヒバクシャ国際署名は、2020年までに世界数億を目指す長距離型の運動です。構え、知恵、大胆さが決め手であり、巨大な地殻変動をつくる気概をもって運動にとりくんでいきましよう。

（飯村しのぶ）

森のめぐみ講座・2月25、26日 スノーシューと上田の文化を訪ねる

らいてうの会のスノーシューの企画には、以前から参加したいと思いながらも、日程その他の事情で機会がなかったのですが、今回やっと念願がなつて夫とともに参加しました。

1日目は、上田の文化を訪ねる

上田駅のすぐ近くのエディターミュージウム・小宮山量平の編集室を訪ね。東京、神奈川、千葉から14人、地元13人の総勢27人が押し掛けました。ぎっしり並んだ椅子に腰かけて、館長の荒井きぬ枝さんから父小宮山量平氏の仕事についてお話を伺いました。



1947年に理論社を創設した小宮山量平さんは、意外にも身近な存在であったことに驚きました。名前ぐらいしか知らなかったのですが、私の子ども時代に接したり、聞いたことのある絵本や童話が、たくさん小宮山氏によって理論社から発行されていたのです。児童文学の「つづり方兄妹」「北極のムーシカミーシカ」「ちびっこカムの冒険」に始まり、「キューポラのある街」「チョコレート戦争」「宿題ひき受け株式会社」「ベロ出しチョンマ」「ブルーフーウー」

「兎の眼」「太陽の子」などなど、映画になったものも含め、数多くの童話や絵本が小宮山氏の手によって発行されていたということに、驚きと感動を覚えました。荒井きぬ枝さんのお話は小宮山氏の仕事の幅の広さと深さを伝えてくださいました。その仕事の大きさと、親しさを感じ、また機会があれば訪れて、ゆっくり作品の一つひとつを手にしたと思います。

昼食後は、上田市内を散策。上田城跡も一度はみておきたいと思い、ひとまわりしたあと、バスで菅平へ、お迎えの車でペンション・パルファンベールへ到着。

2日目は、スノーシューで森の命を感じる

スノーシューを履いたのは初めてでしたが、意外と楽に新雪の上をサクサクと歩け、たつぷり楽しむことができました。インストラクターの方のお話を聞こうと、なるべく前へと歩いていたら、いきなりズボットと足を取られ、雪の深みから立ち上がるのにひと苦労、雪がやわらかいせいか、体重のせいかな？ うさぎの足跡や小鳥が虫をとるために木の皮をはいだ跡や、枝を飛び交う姿を見たり、牧場から根子岳をながめたり・・・菅平の森の中を散策しました。一本松の近くに來ると、「ここで休憩しましょう」と、ガイドさんが手際よく雪をまあるく削ってできた大きな雪のテーブルを囲んで、ホットワインと練乳をかけたかき雪？をおいしくいただき、幸せな気分にならずか2時間の散策でしたが、真っ白な世界を歩く快感をしっかりと堪能しました。(佐藤実喜子)

第13回 平塚らいてう賞 贈賞式

3月10日(土) 日本女子大学において第13回「平塚らいてう賞」の贈賞式があり、米田佐代子会長他4名が出席しました。



昨年、第12回「平塚らいてう賞」(特別)をいただいたNPO法人平塚らいてうの会を代表して、米田会長が記念講演。これまでのらいてう研究から見えてきた「新しいらいてう像」について、自然・母性・平和の3つをキーワードに、映像を交えながら報告しました。

今年度の受賞者は、「シルビア・パンクハーストの女性解放と国際平和活動の研究」をされた中村久司氏、「男女共同参画社会を実現するための教師をどう育てるか、その研究と実践」の佐久間亜紀氏、「憲法上のジェンダー平等規定とその解釈―憲法24条の再定位」の川口かしみ氏でした。

受賞作品の中でひとときわ光っていたのが中村久司氏の著書で、サフラジェットたちの努力と苦闘の跡をしっかりと把握するために、ロンドンをはじめ英国各地の歴史を実際に訪れて調査・記録し、史実を尊重し説得力を生み出したものであるという選考委員のコメントがあり、とても興味を惹かれました。『サフラジェット―英国女性参政権運動の肖像とシルビア・パンクハースト』(大月書店)が出版されています。

(井上美穂子)

らいてうの家隣接地の

「太陽光発電計画」 反対署名提出

上田市真田町大日向自治会・NPO法人平塚らいてうの会・らいてうの家・真田平塚らいてうの会・上田平塚らいてうの会・あずまや高原別荘自治会が一つになって昨年9月以来行ってきた「太陽光発電計画白紙撤回」（事業者に対し）と「不認可要請」（国に対し）にむけた第二次署名4446筆を、3月8日国（環境省）の長野自然環境事務所へ提出、同時に事業者であるHJアセスメント・マネジメント社に送付、その趣旨と署名総数の報告文書を長野県と上田市にも持参、アセス担当の地域づくり工房及び土地所有者の野沢ホスピタリティにも郵送しました。

署名運動を始めてから、新しい動きがありました。昨年11月2日、HJ社による説明会が開催された際、アセス担当の地域づくり工房から「自主簡易アセス中間評価書案」が提示され、基本的に「自然エネルギー」としての太陽光発電設置のメリットを認めつつ、「景観や近隣関係者のこだわり（いわゆる定性的な評価になじまない事項）」に特段の配慮を要する「ことも認め、事業者の原案維持のほか景観保全や一部縮小案、さらに「何もしない」という「ゼロ提案」まで4つの選択肢を示すという異例の説明がありました。地域づくり工房からはこれについての意見を求め、公開ワークショップを開催したいという提案もあり、私たちは「ゼロ提案」支持の意見書を提出しました。3月現在「事業者と意見調整中」とのことです、ワ

ークシヨップは開催されていません。

これに先立ち、らいてうの会は昨年9月、地域づくり工房をらいてうの家に招いて意見交換会を実施、11月の説明会にも会員多数が参加して発言、この10年余り私たちが取り組んできた「自然とともに生きる地域づくり」のあゆみを見つめ、環境破壊を思いとどまるように訴えました。特に予定地は単なる「荒地」ではなく、無数の野草や昆虫たちも生きている貴重な自然の宝庫であり、ここを「地域住民、上田市民、長野県民、ホテルの客、らいてうの家訪問者、薬草園関係者」など多くの人びとと協同し、行政の支援も含め「自然と人間が豊かに生きてゆく場」として再構築をめざすべき」というらいてうの会の意見は、これまでの反対意見を越えて地域の再生発展を願う思いに満ちたものとして、多くの方の共感を呼んだと確信しています。「ゼロ提案」は、私たちの運動の成果でもあると言えます。



環境省長野自然環境事務所へ

環境省（長野自然環境事務所）では、この事業についての申請はまだ出ていないため署名受理のみでしたが、応対した担当官は「ゼロ提案」に関心を示し、上田市でも「まだ申請は出ていない」とのことです、「地元自治会を含めてここまで運動が広がった」ことが注目されました。私たちはただ「反対」ではなく、話し合いを重

ねて地域への深い思いを事業者やアセス担当者にも理解してもらって白紙撤回を実現したいと考えています。私たちの願いが実現するかどうかはまだ霧の中ですが、皆様のご協力に感謝しつつ、もう一步運動をひろげるためのお力添えをお願いいたします。

（植草充代）

【事務局日誌】

1月16日 上田・真田役員会
1月23日 ブックレット編集会議

第5回理事会

2月15日 第4回常任理事会・紀要編集会議
2月25日・26日 スノーシューと上田の文化を訪ねる

3月1日 ニュース1000号発行記念の賞状をあかつき印刷からいただく

3月8日 環境省長野自然環境事務所へ太陽光発電計画不認可要請署名提出

長野県と上田市へ趣意書を提出
HJアセスメント社へ白紙撤回要請署名を、野沢ホスピタリティと地域づくり工房へ趣意書を郵送

3月10日 第13回平塚らいてう賞贈賞式（日本女子大）に出席
3月15日 第6回理事会

らいてうの家貸館のお知らせ

かしわばやしの会・朗読と箏曲と歌の会
7月8日（日）1時半から 会費千円
この日の団体予約は行いません。
らいてうの家の見学入館はできます。



第19回通常総会開かれる

太陽光発電問題の解決めざして

5月27日、第19回らいてうの会総会が東京ウイメンズプラザで開催されました。金輪きみ子事務局長より2017年度の事業報告、2018年度事業計画が提案され、審議に入りました。

○17年度は、「平塚らいてうの会ニュース」が18年1月で100号を迎え記念号を発行し、あかつき印刷より賞状をいただきました。また、弥生

美術館「命短し恋せよ乙女展」に博史宛らいてう書簡を貸し出し、NHK Eテレ「グレートルのかまど」に「らいてうさんのゴマじるこ」が放映されました。らいてう忌は、春苑と茅ヶ崎を訪ねる日帰りバスツアーを行いました。らいてう講座は2月に川田忠明さんを講師に「女性がつく

おほらいてうの会ニュース

発行
平塚らいてうの会
〒112-0002
東京都文京区
小石川
5-10-20-5F
TEL・FAX
03-3818-8626

る平和社会―核兵器禁止条約を中心に」が行われました。紀要10号も発行されました。

12年目を迎えたらいてうの家では、4回のらいてう講座、2回の森の講座と冬の森の講座など多彩な活動のなかで、学びと交流の輪を広げました。DVD「平塚らいてうとらいてうの家」が完成し、らいてうの家で視聴できるようになりました。

「家」の前の太陽光発電問題では、9月に地域づくり工房との意見交換会、11月に太陽光発電所住民説明会参加、意見表明、3月に第二次署名4446筆を環境省（長野自然環境事務所）に提出し、HJアセットマネジメントには郵送しました。その後の動きは見られません。

○2018年度は、太陽光発電問題の解決に向けての行動が焦眉の課題であることから①事業者が強行し太陽光発電設置の申請書を出したら、差し止め裁判を行う、②事業者が撤退の方向を示した場合、あずまや高原の環境を破壊しないで予定地を活用する方向を、土地所有者を含め地域のみんなで考えていくことを決議しました。地域の皆さん、全国の皆さんとしっかり手を組んで解決をめざします。

6月にはらいてう忌記念講演会を行い、紀要11号は、7月発行予定です。らいてう資料のデジタ

ル化、ブックレット作成などもすすめていきます。らいてうの家の今年の企画展示は、「らいてうと博史」で、画家博史の遺品が多数展示されています。例年通り、「らいてう講座」、「森の講座」、「源氏物語講座」、「昔語りの会」などを行います。

組織面では、らいてうの家のこれからを考える「らいてうの家プロジェクトチーム」を置くこと、財政の安定のために、認定NPOの申請に向けて検討することになりました。

気候変動の顕在化、平和を脅かす力などの逆風に対して、らいてうの会の仲間をふやし、会の力をつけて行動していきましょう。（三留弥生）

今年度役員

会長・米田佐代子 副会長・井上美穂子、折井美耶子、小林明子、杉山洋子、花岡静枝、堀江ゆり、三留弥生 事務局長・金輪きみ子 理事・青木俊子（新）、飯村しのぶ、植草充代、北澤有希子（新）、木村見江、久野泉、倉橋純子、杓掛美知子、小林典子、竹花みい子（新）、富松裕子、藤原美津子、宮下昌子（新）、山田繁子、若尾伸子 監事 佐久間由美子、中嶋保枝

『紀要 第11号』 7月発行

自然とらいてう（折井美耶子）／らいてうとアニミズム（奥村直史）／平塚らいてう『戦後日記』（1953―68）を読む―『湯川秀樹日記』との接点（米田佐代子）／地域・風土に見合った自然エネルギーとは（竹盛智敬）／講演記録 女性がつくる平和社会（川田忠明） 頒価700円

学習会報告

地域・風土に見合った自然エネルギーとは

ードイツ・スイス・多古町の

事例から学ぶ「持続可能な社会」ー

千葉県多古町の味産直センター総合産直課長

竹盛 智敬さん

総会後、学習会をおこないました。米田会長の「原発反対の立場からは自然エネルギーはよいことなのに、らいてうの家の前の太陽光発電になぜ反対?という声があるが、地球の自然と人の暮らしを破壊する開発には反対。日本の太陽光発電政策は営利主義を拡散した。では農業や食を守る自然エネルギーとは何か、考えたい」との問題提起を受けて、産直運動と自然エネルギーを結びつけた実践活動を進める講師のお話を聞きました。

竹盛さんのお話

原発をなくしていくには自分たちでエネルギーを作るしかない、安全で持続可能なエネルギーは利益優先の企業に任せていたのでは生まれないと、2012年ドイツ、スイスを視察、「環境と調和した自然エネルギー」とは何かを学びました。

○ドイツ南西部のフライブルク市では、原発反対運動が7年間続き、チェルノブイリ事故後原発建設を断念させ、都市計画の段階から省エネ、再生可能エネルギー活用を考えています。山から下る涼しい風が町を通り抜けるように街路が設計され、家のガラス窓は三重に改築、風力発電5基、バイオガス発電2基、小水力発電4基、ソーラー

温水器は15世帯が備え付け、これらの発電設備は周辺地域の市民の出資で作られています。

○スイスのメルヒナラ村では、木質チップや太陽熱温水器の普及に、消費者から費用を募り、お札に地元特産チーズを届ける取り組みをしています。生産者と消費者が力を合わせ、食料もエネルギーも「地産地消」という新しい地域おこしを教えられ、現在多古町で行っている市民発電「わたしの電気」を考えるきっかけとなりました。

○多古町では、コメの生産者が利用する「コメの共同乾燥施設」の屋根に太陽光パネルを設置、産直運動とともに取り組み、パネルの代金を産直利用者に参加費として負担してもらい、野菜やメロンなど産直品を10年間送る取り組みを始めています。



また隣接の匝瑳市にある「ソーラーシェアリング」とは、太陽光パネルの下で農業を行う地域環境保全型経営です。幅の狭いパネルの下に太陽光がさしこむ麦畑が広がり、人もトラクターも自由に入ることができます。ここで作られた電気をみんなが買うことで農業も守ろうという仕組みです。

話し合いから

○「自然エネルギーも水力、バイオなど多様な

やり方がある。地球環境、地域、自然を守ることが第一に考え、地域の経済を豊かにするためみんなで考え協力することが大切」というお話は、大変勉強になりました。質疑もたくさん出ましたが、ソーラーパネル廃棄の処理システムが業者任せになっているのではないか、という質問に「確かに廃棄までは考えていないのが現状だ、今後は考えるべき」というお答えがあり、私たちの心配が当たっていたことを確信しました。

「太陽光発電計画白紙撤回」運動の新たな動き

昨年11月2日、HJアセット・マネジメント社による説明会で「地域づくり工房」から「自主簡易アセス中間評価書案」が提示されました。私たちは「ゼロ提案」支持の意見を提出し公開討論を待ちましたが、6月現在何の応答もなく、水面下の動きがあるのでは、と警戒しています。

第19回通常総会では、「計画の白紙撤回と同時にあずまや高原の環境を破壊しないで活用する方向を、土地所有者を含め地域のみんなで考えていく」ことを提案、「もし計画が強行されるようなことがあれば差し止め裁判を行う」方針を確認しました。HJアセット・マネジメント社には、6月1日付で追加署名とともに趣旨を送付、「野沢ホスピタリティ」と「地域づくり工房」にも文書送付しました。署名の追加提出は環境大臣宛でも行い、署名総数はHJ社宛で4523筆、環境省宛で4550筆になりました。4月に新しく就任された土屋陽一上田市長にも訴えたいと思っています。

(米田佐代子・植草充代)

らいてう講座 母性保護論争と現代の課題

母性保護論争から100年の今年、新緑に囲まれたらいてうの家で、5月19日、折井美耶子副会長による講座が行われ、約40人が参加しました。

母性保護論争前史

青鞥時代に私は私自身である、性を超越した存在であると主張したらい



てうは、出産後、文筆の仕事と母性との矛盾を体験し、母性保護を主張するエレン・ケイの影響を受け、母性は私ごとではないと考えるようになります。

一方、10人の子どもを産みながら精力的に執筆を続ける与謝野晶子は1916年、「独立自営の女として生きよう」と主張します。らいてうは「国家（社会）の保護なくして母性の独立はありえない」と応えます。二人の論に、青山菊栄（のちの山川菊栄）は「母性保護と経済的独立はどちらも必要だが、現体制の変革なくしては無理」と返します。

母性保護論争

この論争前史を受け、1918年から19年にかけて『婦人公論』や『太陽』誌上で晶子、らいてう、山田わか、山川菊栄による母性保護論争が展開されました。

母性保護に反対する晶子は「男も女も：経済上の保障が：得られる確信があり、：財力が既に：貯えられて居るのを待って結婚し且つ分婉すべき」と、女子の徹底した独立を主張します。一方、山田わか、家庭第一主義を唱えます。らいてうは「母の経済的独立といふことは余程特殊な労働能力ある者のほかは全然不可能なことだとか私には考えられません」と主張します。

経済的独立を訴える晶子に対して、らいてうは「母は生命の源泉」「母性を保護することは：全人類の将来のために必要」と主張します。山川菊栄は社会主義の立場から国家の基礎は家族制度にあるとは愚論であると、晶子とらいてうの論を否定します。

こうした女性たちによる論争に男性による家事・育児が全く出てこないことがこの時代の特徴である、折井さんは指摘します。

論争から行動へ

論争後、女性たちは実際の行動を起こしていきます。らいてうは市川房枝とともに1919年に新婦人協会を結成し、晶子は女子教育のため21年に文化学院の学監に就任します。同年、山川菊栄は社会主義による女性の解放をめざす赤瀾会を結成し、戦後は初代婦人少年局長に就任します。山田わか、34年に母性保護連盟を結成します。

長野県では先進的に女教員産休規定が1908年に制定され、22年には文部省が女教員産前産後休養に関する訓令を出しました。

戦後、労働基準法が制定され、産前・産後休暇、育児時間、生理休暇などが規定されましたが、85年

の男女雇用機会均等法制定にあたって母性保護規定の見直しが行われました。97年には均等法が改正され、女性の時間外・休日労働の規定、深夜業の禁止規定が廃止されることになります。

こうした現状に、今も母性は尊重されていないのではないかと、「セクハラ罪はない」といった発言を許さない世の中にする必要があると、折井さんは訴えます。

日本の婦人参政権はかちとったもの

また、婦人参政権は戦後のGHQによる占領政策で実現したという通説がまかり通っていることに、折井さんは苦言を呈します。45年8月に市川房枝の呼びかけで戦後対策婦人委員会が結成され、政府に婦人参政権の要望を提出し、10月に幣原内閣は婦人参政権に関する閣議決定をします。「戦前からの運動が実って、日本婦人が参政権を得た事実を忘れないように」と市川さんは亡くなる一年前に語っており遺言のように思っていますと折井さんは強調します。

お話の後、会場からは次々と感想の声が上がりました。第1回衆議院選挙で投票されたという93歳の方は、軍国主義教育を受けた者として考え方を变えていくことの苦労があったと言われました。辰野町でらいてうの勉強会を8年間行っている方々は、自伝を読むことで近現代史が理解できたと言われました。「少年少女のための政治塾」を計画しているという参加者に、折井さんは「教育のなかでちゃんと政治を教えないことは問題であり、政治塾に期待したい」と応えて、講座は終わりました。

（飯村しのぶ）

2018年 らいてうの家オープン

4月28日(土)に今年度の「家」がオープンしました。



皆さんによるコーラスで始まりました。混声の絶妙なバランスが良く、息もぴったりで、ステキな30分の演奏でした。童謡から夏の歌、歌謡曲までジャンルの広い演奏が楽しめました。

恒例のお茶会も盛会でした。スタッフの皆さん、準備が大変な中、快くお点前をして下さいました。用意したお菓子は、好評の内終わってしまいました。床の間に飾られた「クマガイ草」の凛とした佇まいが印象的でした。季節に合わせてお持ちになったスタッフと、お客様にこの花の心を如何に伝えるべきか生け方に苦心されていた先生のお姿が目には焼き付いています。

今年の「家」の展示のテーマは、「らいてうー愛と平和の85年」ということで、更に充実したものになりました。らいてうの、女性として人間としてのまた、自然をこよなく愛し、平和を目指した様子がパネルで紹介されています。

昼食には、地元の方々が自慢の腕で、山野菜を天ぷら、煮物、あえ物と沢山に用意して下さい美味しく頂きました。御馳走様でした。

米田会長からは、今年度の方針と計画の説明がありました。また、太陽光発電問題の現状を説明して頂きましたが、具体的進展はないとのことでした。5月27日の特別学習会で新たな具体策が見つかると思いますが、更に運動を推し進めることが必要かもしれません。

今年は残雪もなく、春が早く到来しました。蔵や路も例年になく早く芽を出しています。タラの芽は、すっかり頭を刈り取られましたが、地面の小さな花々が可愛らしく咲き誇っています。「家」も来館者を心待ちにしています。今シーズンも大勢の方が見学に来られるよう皆で力を合わせて働き、声を掛け合ひましょう。
(沓掛美知子)

DVD「平塚らいてうとらいてうの家」完成

らいてうの家に来られた方に短時間で見ていただける物を作ろうと一昨年から取り組み、出来上がりました。平塚らいてうの生涯とらいてうの家建設の様子が10分間の映像にコンパクトにまとめられています。図書室で視聴できます。

「家」にいらして、ぜひご覧ください。

【事務局日誌】

4月10日 第5回常任理事会

4月19日 奥村明史さん遺品寄贈のため来局

紀要編集会議

4月22日 らいてうの家大掃除・オープン準備

4月23・24日 らいてうの家展示準備

4月25日 『東信ジャーナル』が取材に来館

4月26日 DVD「平塚らいてうとらいてうの家」編集会議

4月28日 らいてうの家オープン参加者60名

5月10日 薬草の森りんどう開山式出席

5月15日 第7回理事会・紀要編集会議

5月17日 2017年度会計監査を受ける

5月19日 らいてう講座「母性保護論争と現代の課題」折井美耶子副会長(於らいてうの家)

5月27日 あずまや高原別荘自治会総会出席

第19回通常総会(於東京ウイメンズプラザ)・第1回理事会

5月27日 学習会「地域・風土に見合う自然エネルギーとは」竹盛智敬さん

6月1日 太陽光発電計画白紙撤回署名、不認可

6月10日 らいてう忌講演会「改憲の動きと家族

・国家」山口智美さん(於東京ウイメンズプラザ)

6月21日 第2回理事会

計報 理事として力を尽くされた関町好子さんが

3月12日に逝去されました。

謹んでご冥福をお祈りいたします。



「行政としても最大限の努力をしたい」 らいてうの会 上田新市長と懇談

3月の上田市長選で、土屋陽一氏が新市長となり、「らいてうの会」から市長就任のお祝いとともに、太陽光発電問題の現状についてお話ししたい旨申し入れていたところ、8月3日話し合いが実現しました。

市側は土屋市長（写真左から2人目）をはじめ、都市建設部長翠川氏・都市計画課長嶋尾氏・課長補佐杉浦氏の4名、「らいてうの会」は米田会長はじめ理事8名の9人での話し合いでした。初めに米田会長から土屋新市長就任のお祝いを述べ、太陽光発電問題での現状と、反対運動はただ反対ではなく、あずまや高原の自然を生かし、訪れる人々を楽しませる

おほらいてうの会ニュース

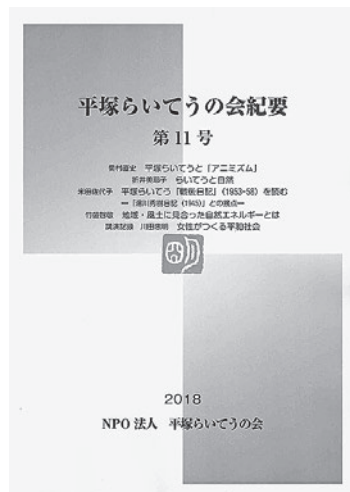
発行
平塚らいてうの会
〒112-0002
東京都文京区
小石川
5-10-20-5F
TEL・FAX
03-3818-8626

場所にして行けたらと考えて運動をしている旨話しました。土屋市長からは「太陽光発電について今のところ動きはないが、四千名からの署名は有効である。環境課としても、行政としてもどこまでできるか、国立公園内などを『レッドエリア』としたガイドラインをどのように生かしていくのか、答えはすぐには出ないが自然を生かす方向を考えていきたい」というお話がありました。

「らいてうの会」各理事も、上田地域はあずまや高原の自然をはじめ歴史的にも大笹街道や古くから地域の水源として水の神様が祭られていること、素晴らしい自然の中で「らいてうの家」が地域の憩いの場となるための努力をしてきたことを説明、上田市の理解を求めました。

上田市長が「行政としても最大限の努力をした」という姿勢を見せてくださったことは、これからの運動に大きな力を得た思いでした。都市建設部長からも「指導要綱やガイドラインを作ってきたのは、太陽光発電には好ましくないエリアを意識しているから」との発言があり、たいへん心強く感じました。事業者（HJアセット・マネジメント社）からは昨年11月の説明会以降何の応答もありませんが、らいてうの会としてはさらに多くの方々の支援をいただき、計画「断念」に向けて運動を推進したいと考えています。（植草充代）

紀要第11号刊行



奥村直史さんに寄稿いただいた「平塚らいてうと『アニメズム』」は、らいてうの随筆『雲・草・人』（1933年）を通してらいてうの姿勢や感じ方、宗教的な心情に迫る貴重な論考です。

折井美耶子副会長による「らいてうと自然」は、『らいてう自伝』に添いながららいてうの自然への想い、生命観や宇宙観を探ったものです。

米田佐代子会長による「平塚らいてう『戦後日記（1953-58）』を読む——『湯川秀樹日記（1945）』との接点」は、この時期になぜらいてうは湯川秀樹の活動に強い関心を持ったのか、二人が共鳴しあった平和思想の原点はどこにあるのか、その手がかりを紹介した論考です。

太陽光発電問題については、6月に行われた竹盛智敬さんによる特別学習会「地域・風土に見合った自然エネルギーとは」の要旨を収録しました。

巻末に、2月に開催された川田忠明さんによるらいてう講座「女性がつくる平和社会——核兵器禁止条約を中心に」の記録を収録しました。

（飯村しのぶ）

らいてう忌 講演

「改憲の動きと家族・国家」

梅雨寒の6月10日、東京ウイメンズプラザでらいてう忌が開催され、文化人類学者の山口智美さん（アメリカ・モンタナ州立大学）に「改憲の動きと家族・国家」について語っていただき、約30人が参加しました。

なぜ今、憲法がねらわれているのか

安倍首相は「女性の活躍を成長戦略の真ん中に位置づけている」と言いますが、女性の人権のためではないと山口さんは言います。

「3人以上の子どもを産み育てていただきたい」「赤ちゃんはママがいいに決まっている」など、自民党議員による相次ぐ問題発言には彼らの

家族観、子育て観があり、真の女性活躍とは明らかに矛盾しています。

さらに、憲法24条を変える動きと、憲法を変える前段階としての「家庭教育支援法案」は大きく関連していると、山口さんは指摘します。自民党の改憲草案には「家族は…基礎的な単位」「家族は、互いに助け合わなければならない」という家族保護条項があるのです。

改憲派はなぜ24条をねらうのか

憲法24条は1954年の自由党憲法調査会の論点とされ、その後ターゲットとされてきました。2004年には自民党内で24条見直しが提言され、2012年に改憲草案がつくられました。

改憲派にとって理想の家族は「サザエさん」一家、3世代同居であり、縦の系譜を意識する共同体です。また、24条を改正すべき理由として「行きすぎた個人主義」を挙げ、現行憲法の13条と24条にある個人主義により家族が崩壊し、少子化の原因になっていると言っています。

24条を変えようという運動を展開している日本会議（1997年設立、会員4万人余）は、全都道府県に本部を置き、署名運動や集会、裁判の傍聴の動員などを行っています。さらに「憲法おしやりカフェ」を各地で開催し、「自民党改憲マング」[かえるんエコバッグ]をつくるなど、女性にアピールしています。日本青年会議所（JC）憲法改正委員会も、改憲推進のために「目指せ 全国3000万人賛成投票プロジェクト」と銘打って、様々な運動を行っています。

安倍政権のジェンダー政策

安倍首相は「ニッポン一億総活躍プラン」（2017年）として「新3本の矢」を打ち出しましたが、その中身は「家族の支え合い」をベースとした少子化対策・介護政策であり、右派の家族像である「伝統的拡大家族」の復活を目指すものではないかと、山口さんは危惧しています。

地方自治体や商工会議所による結婚支援、ライフデザイン（結婚・妊娠）を構築するための情報提供は、まさに「官製婚活」です。各自治体の男女平等参画の部署には、既に地域少子化対策重点交付金が配られているという実情があります。

内閣府や文科省はライフプラン冊子の配布や講座を行っています。その内容は「妊娠、出産、子育て」「卵子の老化」説といったものです。

東京都は「オリンピックまでに結婚を」という動画を作成して、映画館や電車で放映しています。こうした動きは男女平等に逆行するものと言わざるを得ません。

家庭教育支援法案の問題と背景

第1次安倍政権では「家族の日」「家族の週間」が導入されました。現在、自民党が提出を検討している「家庭教育支援法案」は、家庭教育の目的やあり方を法律で定めようとするものです。家族を「社会の基礎的な集団」とする法律が成立すれば、24条の個人の尊厳と両性の平等は骨抜きになってしまいます。こうした動きの背景には大平内閣（1979年）の「日本型福祉社会」の再評価があります。戦前回帰的な「家制度」復活だけでなく、新自由主義の影響に注目する必要があります。山口さんは指摘します。

リベラルと言われる男性であっても反論が難しいこうした問題に対して、私たちは毅然とした姿勢で対抗していかなければいけないとの山口さんの訴えを参加者は深く受け止め、講演は終わりました。

（飯村しのぶ）



らいてう講座Ⅱ

「世界民」と「運命の連帯」

—平塚らいてう「戦後日記」と湯川秀樹「1945年日記」が語る「平和」とは—と題する米田佐代子会長の講座が8月4日にらいてうの家で行われました。講演の要旨を紹介します。

平塚らいてうと湯川秀樹の接点

1971年らいてうの葬儀に湯川秀樹・スミ夫妻が京都から参列している。湯川秀樹は1981年死去するが、スミ夫人はその後2001年創設されたNPO法人平塚らいてうの会の呼びかけ人となっている。



らいてうの1953年から58年までの「戦後日記」は大学ノートに書かれたもので、最近遺品の

中から見つかったが、らいてう没後編集された自伝4巻（戦後編）に多数引用されていることがわかった。自伝戦後編が平和運動中心の記述になっていてらいてうらしくないという意見があるが、この日記を読むとこの時期のらいてうがいかにか国際的な平和運動に熱意を持っていたかがよくわかる。特に新聞記事などの切り抜きも多数貼っており、その少ない部分も湯川秀樹の核実験停止、核廃絶をめぐる国際的活動を報じた記事であった。らいてうはなぜ湯川の活動に強い関心を持っていたのか。二人が共鳴しあった平和思想の原点は

どこか。

「湯川日記」の概要

現在読むことが出来る湯川の戦後日記は、1945年（全文）と1954年の一部（ビキニ事件関連部分）である。京大の湯川秀樹記念資料室からネット上で公開されている。

1945年日記には、空襲や沖縄戦、広島・長崎への原爆投下等のニュースなどが記録されている。ポツダム宣言やソ連の対日宣戦布告も書き写され、9月に広島を視察した京都大学荒勝教授の報告も聴いたとある。上野駅や大阪駅に戦災で家や家族を失った人びとが餓死寸前の状態で路上生活していることも書かれており、一方日本国憲法成立以前に「憲政の神様」尾崎行雄が当時の東久邇首相に出した「軍備撤廃」を説く意見書にも着目している。湯川が、戦争が庶民にあたえた被害を実感し、ノーベル物理学賞受賞以前から「軍備をもたない」平和を考えていたことがわかる。

らいてうが湯川に共鳴した原点はここだった。

らいてうの「戦後日記」の概要

らいてうの戦後日記は空白が多いが、1953年婦団連会長に就任後、婦団連が国際民婦連に正式加盟してから副会長を引き受ける経緯はこの日記に書かれ自伝に引用されている。ビキニ事件当時の記述はないが、この時国際民婦連を通じて世界の女性たちに核兵器をなくすため立ち上がることを呼びかけ、これが世界母親大会のきっかけになった。1956年の日記には「母親大会とは人類の生命の尊さを知って、それを守る会だ、世界中の人間一人一人の尊い意味を教え、それを大切に

にするための会である」とあり、母親だけが子どもを守るというような考え方をしていなかったことがわかる。

らいてうの平和思想の原点は「いのち」だった。第1次世界大戦中に子どもを産み母性に目覚めたらいてうは、女性に権利がなく、自ら産んだ「いのち」が戦争で殺されることに反対できないのは許せない、1919年新婦人協会を設立して平和のために女性の権利を、と運動した。来年百周年になるが、「平和運動」としての新婦人協会という側面にも注目したい。ここから「いのちを産む性」である女性が平和をつくる力をもたなくてはならないという平和思想が生まれたと言える。

「世界平和アピール七人委員会」の活動参加

らいてうの戦後日記は彼女が世界連邦思想に共鳴し、1955年世界平和アピール七人委員会に参加した時期にあたり、ここで湯川秀樹らとともに活動する。病気がちで会合に欠席も多かったが、1956年日記には「七人委員会にもっともっと協力したいと思う」という記述もある。湯川が「核兵器廃絶」を訴える新聞記事のほか、らいてうたちが「国際会議参加の学者たちに旅費のカンパを」と訴えた記事もある。らいてうは「国家の壁を超えた世界民」を、湯川は「人類全体が互いに他の運命に敏感になり、互いに助け合おうとする」ことを説き、これが二人の平和思想だった。

この日記をデジタル化し、らいてうの会ホームページで公開したいと検討中。詳しい内容は紀要11号（本年7月刊）の米田会長による「解説」をご覧ください。

（沓掛美知子）

森のめぐみ講座

7月16・17日

1日目は、らいてうの森の笹刈りです。例年にならない暑さでしたが、熱中症で倒れる人もなく、皆さん、汗だくになりながら、ブナの木を周りを刈りました。林の手前のブナは鹿にやられたのか以前より少ない気がしました。奥の方はどれも2m以上の木に育っていました。そこは、笹より他の木や植物が繁茂しています。その方がブナにとつて居心地がよいのでしょうか。ブナに聞かないと分かりません。

終わった後は、お楽しみの昼食。真田の会員さんが育てたじゃがいもと玉ねぎの入ったカレー。採れたてのキュウリと梅味噌の取り合わせ。差し入れのみずみずしいレタス。恒例のイワナの塩焼き、炭火で焼く香ばしい匂いを嗅ぎながら、美味しくいただきました。

午後は、庭の手入れです。植物観察をかねて、疲れも見せず頑張りました。庭に、今まで見たことのない植物がありました。「ヤマニガナ」では？8月初旬に、黄色の小さな花をたくさんつけるか、確認してみてください。
(倉橋純子)

2日目は、蚕都・上田めぐりです。東京13名、上田真田17名参加で、連日の猛暑のなか熱心に講師の方々の話を傾けました。

午前はまず信州大学繊維学部金勝康介先生の案内で国の登録文化財で近代化産業遺産の講堂見学です。ステージなどに桑・蛾・繭のデザインがあり、折り上げ格天井など歴史を感じさせるもの



信州大学繊維学部講堂前で

でした。赤レンガの建物の資料館には明治44年開校の上田蚕糸専門学校からの貴重な資料がありました。江戸末期からの織物見本帳や蚕の幼虫の模型や繭の見本などが保存されています。現在ファイバー工学をリードする信大の「植物工場」では人工光によるレタス栽培の実験室で地物のレタスとの食べ比べをしました。そして猛暑の桑畑見学。昼食は学生食堂でとり、ひと休み。

午後は藤本蚕業歴史館見学。ご先祖が桑の品種改良に力をつくした藤本化工の佐藤修一さんからは「蚕種」について昔の蚕室でお聞きしました。微粒子病に苦しんだイタリア・フランスに開国後、病気に強く細くて艶のある上田・塩尻の蚕種を高く輸出し大もうけをしました。そのお金で上田の文化も生まれたと。種を作る工程の珍しいビデオや多くの資料が民間でも保存されているのには驚きました。次に見学した小岩井紬工房は昔の種屋さんの豪壮な建物の一角にあります。手織りの上田紬は今やここだけです。若いころ前進座の女優さんであった小岩井カリナさんがたくさん工程を説明してください、伝統工芸を守る難しさ大切さを知りました。日本の近代化を支えた蚕糸の歴史の盛衰を知り、蚕糸産業は女性が支えていたのだと改めて思いました。
(木村見江)

【事務局日誌】

7月16日 森のめぐみ講座・らいてうの森笹刈り

7月17日 蚕都・上田めぐり

7月27日 第1回常任理事会

7月30日 紀要第11号発行

8月3日 上田市長と懇談

8月4日 夏の夜空を楽しもう 講師・塩沢崇さん(於らいてうの家)

8月5日 らずまや高原自治会「消防訓練と懇親会」参加(於栗草の森りんどう)

8月21日 婦団連「戦争はごめん女性のつどい」参加 書籍等販売

9月2日 らいてう講座 紫式部からのメッセージ ジ 講師・宮島満里子さん(於らいてうの家)

9月14日 第3回理事会

9月30日 らいてうの庭の手入れ

▼会費、ご寄付などのご送金いつもありがとうございます。2018年度の会費未納の方は、ご送金よろしく願います。

郵便振替口座 00150-9-553046

●みずほ銀行新宿西口支店 普通貯金

口座番号 4815505

特定非営利活動法人平塚らいてうの会

おほらいてうの会ニュース

新婦人協会発足100周年

女性の権利を求めて、社会の改造を

平塚らいてうの会副会長 折井美耶子

今年2019年は、らいてうが新婦人協会を発足させてから100年目にあたります。時代は正デモクラシーの最盛期。国内では男性の普選運動や労働運動、農民運動などが活発化していました。イギリスではサフラジェットなどの運動の結果、1918年に女性の選挙権が実現、アメリカでも婦選運動が盛んに行われていました。

らいてうは結婚・出産・育児などを経験し、与謝野晶子らとの母性保護論争を通じて、女性の社会的地位の低さと無権利状態を痛感します。そして女性の立場から社会の改造をめざそうと決意し、若い市川房枝に声をかけ相談しました。

新婦人協会設立の発表

ちようどそのころ大阪で第1回婦人会関西連合大会が開催されることになり、らいてうはその招待に応じて出席し、1919年11月24日そこで新婦人協会の設立を発表しました。帰京後の12月19日、新婦人協会発足の新聞発表を行いました。「創立趣意書」には「婦人相互の団結を計り、婦



第1回総会1921年6月12日、立っているのは市川房枝、一人おいて奥むめお、となり洋装が平塚らいてう

人擁護のため、その進歩向上のため、或は利益の増進、権利の獲得のために」と書かれていました。

新婦人協会が先ず取り組んだ課題は、「治安警察法第五条修

正」と「花柳病男子の結婚制限法制定」でした。

女性が参政権を得るためには、治安警察法を変えなければなりません。その第五条には女性の政治参加を禁止する項目があり、政党加入はおろか政治集会に参加することもできませんでした。また当時の日本には売買春を認める公娼制度があり、男たちは公然と「女を買う」ことができ、そこを媒体として「花柳病」（性病）が蔓延していました。この法案は性道德のダブルスタンダードの是正をめざすものでした。

嵐のような運動の日々

この運動は熾烈をきわめました。めざす課題実現のために宣伝をし、署名を集め、頭の固い男性

発行
平塚らいてうの会
〒112-0002
東京都文京区
小石川
5-10-20-5F
TEL・FAX
03-3818-8626

議員を相手に国会請願をくりかえす、間には講演会や学習会を開催する、機関誌『女性同盟』を創刊する、名古屋、大阪、神戸、広島など各地に支部を設立する等々、夜を日についで嵐のような活動でした。なかでも中心となったらいてうと市川の負担は身体的にも経済的にも大きいものでした。らいてうは自家中毒のため頭痛に悩まされるようになり、静養のため千葉や那須などに転居し、市川も疲労が蓄積、意を決して婦選運動など研究のため渡米します。その後も坂本真琴、児玉真子、衆樹安子らが奮闘して議会への請願を行います。

1922年の第45議会でもようやく治安警察法改正案が提出され、「第二項中 女子及」を削除する法案が、3月18日衆議院で、25日深夜11時40分貴族院で可決されました。この改正によってようやく女性の政治参加への扉が開かれ、その後、婦人参政権獲得運動が展開されます。しかし昭和になり戦争に入ると運動は弱体化します。

婦人参政権の実現

戦後、1945年8月市川の呼びかけで戦後対策婦人委員会が結成され、政府に婦人参政権の実現を要望し、10月幣原内閣によって閣議決定し、婦人参政権は長い闘いの末ようやく実現しました。婦人参政権は、世に言う「マッカーサーのプレゼント」ではありません。らいてうをはじめとする先人たちの運動の賜物であることを、新婦人協会発足100周年の今年、しっかりと心に留めておきましょう。



右から明史さん、折井美耶子副会長、井上美穂子副会長
2018年3月、らいてうの会事務所

会の事務所にお持ちになった時に見せていただいた「らいてうひらがな」を紹介します。孫から見たらいてうの一面が綴られています。

らいてうひらがな

おくむらはるふみ

わたしが おもうことを かいても、だれもよろこんで よみません。でも、このひとからきたこと、このひとを みて おもったことをかけば、みなさんは、よんでくれる かもしれない。このひとは 平塚らいてうです。わたしの おばあさんです。わたしが だいがく3ねんの5がつに なくなりました。だいがくじだいに、おばあさんは わたしのいえから 50メートルぐらい はなれたいえに すんでいました。ひ

昨年らいてうの家に展示していた水彩画、画材、かばんは、らいてうのお孫さんのおくむらはるふみさんから寄贈された遺品です。

あるひ、おばあさんは ほんを かしてくれました。そのなかに かのじよがかいた れんあいろんが ありました。すぐ もつてかえり よみました。なんだこれ このおんな、れんあいろんのなかに しつれんのはなしが かかれていない。

つぎのひに ほんを かえました。そして、ついでに いいました。「おばあちゃん、ふられたこと ないでしょう。えー？」しばらくのちんもく のあとに こたえました。「・・・わたしやふられたことが ないんだよ！」おしだしのつよい ことばで。

「ぼくは こんげつ ふられたばかりだ。ふられたところの れんあいろんが よみたいなあ。」かのじよは むっとして なにも こたえませんでした。それから しばらくして はなしかくひとは いなかったのだよ。」ほこりが かんじられました。

がくせいいうんどうが さかんでした。「みんな しゅせいねんどうめい」という そしきが あって、みじかくして 「みんなせい」とよばれていました。おばあさんに いいました。「だいくでは みんなせい みんなせい」といって ばかに

されるんだよ。」おばあさんは きょうさんとうの しじしゃです。「・・・」ぜんぜん きにしない。ばかにされるとか そんなけいされることに むとんちゃくなのかな。かつてに ばかにしなさい。かつてに そんなけいしなさい。ということ かな！

スロープ since 1969

2012年8月第4号より

「地震ニモ台風ニモマケズ」 北海道かららいてうゆかりの茅ヶ崎ツアー

いつも北海道平和婦人会を中心にしてらいてうの家を訪問してくれる「旅ツアー」社が、今年は趣向を変えて「らいてうゆかりの茅ヶ崎」から小林多喜二が泊まった七沢温泉、東京大空襲・戦災資料センターなどを回る「戦争と平和を考える」旅を計画。地震や台風の影響が心配されましたが無事10月2日催行されました。

米田会長が羽田空港に出迎えて茅ヶ崎まで同行し、「らいてうと博史の愛の真実」「茅ヶ崎での子育てとらいてうの平和思想」などの話題を提供、「紀要」15部も完売しました。現地では跡地に建つ『太陽の郷』の方から南湖院が戦争末期に海軍基地にされ、戦後は占領軍に接収された苦難の歴史も伺いました。明治の面影を残す第一病舎は茅ヶ崎市に寄付され、現在は国の登録有形文化財に指定されています。その後らいてうの記念碑の前で記念写真を撮影、みなさん大喜びでした。

らいてう講座4

松代大本営が残したものは・・・

秋も深まる10月14日(日)らいてうの家でNP
O 法人松代大本営平和記念館理事松樹通真さん



(現在、地下壕の見学者へのガイドや記念館の運営や地下壕の保全に携わる)の講演と、上田平塚らいてうの会の富松裕子さんの証言をお聞きしました。男性8名を含む40名の参加者で会場はいっぱいでした。

松代大本営とは…(講演要旨)

太平洋戦争の戦況が悪化する1944年、日本軍は総司令部・皇居などを東京から移転させなければと考え、移転先を松代に決めました。松代が選ばれた理由は、東京からある程度離れていて飛行場(長野市大豆島)がある、信州は神州に通じる、皆神山という地名がある、労働力がまだ潤沢と思われたことでした。実際は、朝鮮半島からの強制連行を含む朝鮮人労働者が主体でした。多い時で6500人(うち500人は家族)程が、劣悪な環境の中で敗戦までの9カ月間、総延長約10キロの地下壕掘削工事に従事しました。工事は、発破時の逃げ遅れ、落盤事故、栄養失

調などにより多くの犠牲者が出る危険なものでした。この地下壕を始めとして、長野盆地一帯で国体を維持するための本土決戦に備えた工事が進められたものの、結局は使われず終戦となりました。

このような自国の歴史的事実を肌で感じ、自ら考え行動するきっかけとなるよう、ガイドの質を高めるよう努力しています。

今年6月、松代地下壕工事に関わった朝鮮人名簿2600人分が見つかり、さらに当時の実態が明らかにされる可能性が出てきました。

開業医の祖父が負傷朝鮮人を…(証言)

幼少期から10代半ばまで松代に住んでいました。終戦当時3歳でした。おぼろげな記憶に残るのは、開業医だった祖父がムシロに包まれて運び込まれた負傷した朝鮮人を診る姿でした。祖父がうなずくと中へ入れられ、首を振るとムシロに包まれてどこかへ運び去られました。また天秤棒に鍋釜をぶら下げ、駅から飯場に向かう隊列の放つ音も記憶に残りました。

戦後になって朝鮮人の同級生が住んでいた飯場まで遊びに行った時、その母親から一家で強制連行された話を聞きました。中学生の時、北朝鮮へ引き上げていって一年くらいは手紙がクラスへ届いたがそれきりになっています。

富松さんの証言は、松樹さんのお話を正に裏付けるものでした。差別や人権そして戦争について考えさせられる講座でした。韓国最高裁による戦時徴用工訴訟判決やアジアの平和を考える上で、

これからも学んでいかなければならないと強く思いました。
(宮下昌子)

今年こそ太陽光発電撤退を

2016年夏、らいてうの家の目の前に太陽光発電設備設置計画が持ち上がり、わたしたちは水害や景観破壊の心配とともに、オープン以来森に木を植え、自然の山野草や生き物を大事にしていた立場から「らいてうの家に太陽光発電は似合わない」と反対、地元自治会や別荘自治会のみならず、署名運動をはじめ、上田市や長野県、環境省などに訴えてきました。

一昨年11月に「簡易アセス中間評価書案」の説明会が開かれたときも会員多数が出席、「パネルの枚数を減らす」などの「譲歩案」も出しましたが、それではこの地の自然と歴史・文化は守れないと主張、アセス担当者は「公開討論会」を約束しましたが、実現しないまま1年以上経ってしまいました。しかし、いつ「事業開始」と言いだすかわかりません。また土地には高い値段の売電権がついているので、悪質な業者に転売される恐れもあります。

今、全国で自然と暮らしをこわすメガソーラー計画が進行中です。1月14日(月)には東京中野「なかのZEROホール」で「全国メガソーラー問題中央集会」が開かれ、らいてうの会も参加します。「自然エネルギー」をもうけ主義の道具にしてはならない。今年こそ「撤退」をめざして運動しましょう。
(米田佐代子)



シダやコケが見られる小鳥ヶ島

らいてうがいた場所——赤城山と大沼

1913年6月下旬、27歳のらいてうは、奥村博史と新緑の赤城山へと旅立った。二人が同居生活を始める前年のことである。

長沼智恵子から赤城の風景の素晴らしさを聞いていたらいてうは、随筆『円窓より』の印税が入ったので、一人で行こうと計画していた赤城旅行に「ふと現れた」博史を誘う。

その赤城をぜひこの目で見たいと思い、2018年の初秋に出かけてみた。前泊した赤城温泉郷から車で30分ほどの急勾配をのぼると、美しい湖、大沼が現れた。

二人は、前橋から赤城山への23キロの道程を、案内人を立て、手を取り合っていたのぼり、「山上の湖」（大沼）の沼尻の宿に落ち着いたと、らいてうの『自伝』にある。二人の他に客はなかったという。

滞在中のある日の昼過ぎ、湖で楽しそうに小舟をこぐ博史を見たらいてうは、湖に浮かぶ「小鳥ガ島」に博史を誘った。「輝く太陽、蒼い空、野鳥の囀りや花と森の

香り、標高千三百余メートルの展望と鏡のような山上の湖」

「太古のもののような厚い苔や羊歯の密生する緑のその島に、永遠の愛の証を残すことをためらいませんでした」（『自伝』）

博史は、このときの情景を自伝『めぐりあい』でさらに情熱的に描いている。

「二つの魂が一つに結ばれたとき、地上いっさいの物の姿は消え失せて、もはや自他のけじめなく、埤堦の中の白熱した黄金さながら流動体となつて、唯くるくる渦巻き踊る円である」博史を見送り、ひとり残ったらいてうは、湖に面した窓際に机を置いて執筆を続けた。



大沼は今では観光地となり、スワンボートが並んでいる。島へは歩いて行くことができ、赤城神社に続く赤い橋も架けられている。若きらいてうと博史の姿がまだそこにあるようで、名残惜しい思いを抱きつつ、帰途についた。（飯村しのぶ）

訃報

「平塚らいてうを記念する会」の発起人であり、元日本女子大学長の青木生子さんが11月14日逝去されました。茅ヶ崎の記念碑や記録映画制作などにご尽力されました。謹んでご冥福をお祈りいたします。

〔事務局日誌〕

10月8日 全国メガソーラー問題シンポジウム

（茅野市）参加

10月14日 りいてう講座 松代大本営が残したものは…（於らいてうの家）

10月23日 第2回常任理事会

10月30・31日「らいてうの家」大掃除・反省会

11月1日 展示収納作業 「家」冬季休館

11月15日 第4回理事会

12月3日 カルチャールラジオNHKラジオアカ

イブス「声でつづる昭和人物史」平塚らいてう」NHK第2で放送

12月6日 第3回常任理事会

12月18日 新婦人協会創立100年打ち合わせ

12月26日 青木生子さん日本女子大学葬参列

らいてう新発見「戦後日記」公開記念

らいてう講座・東京 2月9日（土）13時半

東京ウイメンズプラザ

——平塚らいてう「平和の夢」の100年

講演とトーク・米田佐代子会長&奥村直史氏
*らいてうが湯川秀樹らとともに核兵器廃絶を訴えた50年代の日記が1月中に会のホームページにデジタル公開されます。その内容は講座で。

平塚らいてうの会ニュース

発行
平塚らいてうの会
〒112-0002
東京都文京区
小石川
5-10-20-5F
TEL・FAX
03-3818-8626

新婦人協会発足100年の年に

～総会で語り合ひましよう～

「このいまわしい反動の嵐の中で、わたくしたちはどこまでも憲法を防波堤としてたたかう必要があり、それゆえにこそ、憲法改悪をねらう汚れた手から、あくまでも憲法を守り抜かなければならないと覚悟しております」。1966年のらいてうの言葉です。幾たびかの改憲の危機をのりこえてきた憲法を守る、今年は正念場です。

研究活動、講座とシンポジウム

昨年のらいてう忌は山口智美さんの講演「改憲の動きと家族・国家」、らいてう講座（東京）は米田会長の「平塚らいてう『平和の夢』の100年」の講演を実施、らいてうの「戦後日記」の公開はマスコミの注目を集めました。『紀要第11号』も発行されました。

今年は女性差別撤廃条約が国連総会で採択されてから40年。世界から大きく立ち遅れた日本でも、最近、女性自身による差別への告発が勇気をもって行われ世論を動かしています。女性自身の運動の足跡を訪ねて、新婦人協会についての3回の講座とシンポジウムを企画しています。

『青鞥』の後、女性の社会参加の必要を痛感したらいてうが、子育てをしながら渾身の力を振り絞った新婦人協会から私たちにつながるものは何なのか、学びましよう。

太陽光発電計画の撤退を必ず

昨年度の総会決議により、差し止め裁判も辞さない旨を日アセット・マネジメント社に伝えて以後、表立った動きはありませんが予断は許しません。国による規制のない中、会では8月に上田市長と会見し、市長は「行政として最大限の努力をしたい」と表明、後日、らいてうの家の前の設置予定地を視察するなど積極的な姿勢で、2019年1月には「太陽光発電設備の立地に關する条例検討有識者会議」の初会合が開かれました。会は、メガソーラー問題シンポジウム（茅野）などに参加して持続可能な社会を実現する自然エネルギーのありかたについて交流してきましたが、上田地域での関係団体との合意形成を大切にして太陽光発電計画の撤退を実現ましよう。

「平和・共同・自然のひろば」らいてうの家

～みんなの知恵で諸問題の解決を～

「家」では「らいてう」のDVDが活用され来客に好評でした。博史の絵などの展示、らいてう

講座、森のめぐみ講座などもそれぞれ充実した内容で実施されました。「家」は14年目を迎えますが、入館者数の伸び悩み、お当番体制、家の修繕などの問題も出てきています。みんなの力で育ててきたらいてうの家を維持するために知恵を出し合って解決していきましよう。（三留弥生）

第20回通常総会と連続講座第1回のご案内

日時 5月26日（日）13時開会

会場 東京ウイメンズプラザ 第1会議室

議題 ①18年度事業報告と決算報告

②19年度計画（案）と予算（案）

③新役員選出

④その他

新婦人協会発足100年記念連続講座

「平塚らいてうと新婦人協会を考える」

今、私たちは何を受けつぐか」

第1回 総会後14時30分より 同会場

「100年前の女の元氣」米田佐代子さん

第2回 7月上旬

第3回 9月中旬

シンポジウム 11月下旬予定

らいてうの家イベント案内

オープン 4月27日（土）10時30分～

ソプラノ独唱 安達寛子さん 春のお茶会

らいてう講座「新婦人協会」 6月2日（日）

森のめぐみ講座 6月30日（日）7月1日（月）

らいてうの森で笹刈り・薬草園で学ぶ

太陽光発電学習会

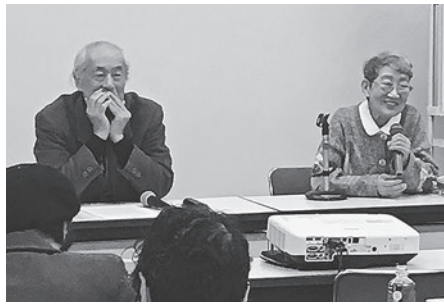
らいてう講座（東京）
平塚らいてう「平和の夢」の100年
——女性がつくる核も戦争もない世界

朝から小雪が舞う2月9日、東京ウィメンズプラザで「らいてう講座」が開催されました。「戦後日記」（1953～58）の記者発表の反響もあって、50余人が参加しました。

戦後のらいてうを理解するための貴重な資料

第一部では、『戦後日記』公開に寄せて」と題し、米田会長が講演しました。米田会長は「戦後日記」を読み解くなかで、自伝『元始、女性は太陽であった』には小林登美枝さんが盛り込めなかった部分が多く、この時期のらいてうの思考や行動を知る貴重な資料だと位置づけます。

「戦後日記」を読み解く



1950年代のらいてうは、国際民婦連などを通じて国内外の平和活動に参加し、「対立ではなく、婦人のねがいをひとつに」という強い意志を表明します。「中国と講和を」「戦争を阻止できなかったことを愧じる」との記述からは、戦争責任を自覚していたことが

うかがわれ、やがて世界連邦思想に共鳴し、世界連邦と世界平和アピール七人委員会の活動に参加するようになります。

一方、日記には宗教的世界とのつながりを思わせる記述が多々あります。

湯川秀樹の核実験禁止、核なき世界を求める運動に共鳴していたこともわかります。日記には、原水爆反対の科学者会議（パグウォッシュ会議）など、多くの新聞切り抜きが貼り付けられているのです。

「ただ戦争だけが敵なのです」（1950年）というらいてうの「こころざし」を私たちは受け継ぐ役割があると訴え、講演は終わりました。

らいてうの二つの面を一つの人格として

第二部では、成城の家の庭に座る晩年のらいてう（中西悟堂撮影）を背景に、「いのち・自然・平和——『素顔のらいてう』が伝える平和への思い」と題して、奥村直史さんに語っていただきました。

「ほとんどの時間、部屋に閉じこもり、夜中まで机に向かう生活で、同じ家に暮らしていても遠い存在」「孤独を好み社交性に乏しく閉じこもりがちで内向的で口数の少ない小柄な人だった」と奥村さんは語ります。（詳しくは奥村直史『孫が語る素顔 平塚らいてう』平凡社）

奥村さんは、平和運動や女性運動など文筆で現れる姿と、20歳の時の見性体験から生まれた自己認識というらいてうの二つの面を一つの人格として理解することにこだわってこられました。らい

てうにとつては大きな命の力が神であり、生涯の自己認識であると思に至ったと、奥村さんは言います。

真性の人として生き、執筆したらいてう

25歳で書いた「元始、女性は太陽であった」からは、時代や地域に拘束されない「真性の人」として生きたいという意志が読み取れ、それが『青鞥』の活動をもたらしただろうと、奥村さんは解釈します。

らいてうは1950年に「非武装、非交戦をあくまで守り抜く決意」「夫や息子を戦場に送り出すことを拒否する」と訴え、62年の軍縮のための日本婦人集会では「軍縮は：生命の守り手である婦人の力でなければ達せられない」と挨拶しています。

85歳で亡くなる最晩年まで平和を訴え、「戦争を好まないのは、生命を生み、育てる種族の母である女性の本能」と考えたらいてうの根本には、若き日の自己存在の発見と見性体験があったに違いないと、奥村さんは結びました。

二人のお話を受けて、会として今後も「戦後日記」を読み解き、らいてうを新発見する場を設けていくことを確認し、講座は終わりました。

（飯村しのぶ）



会場に展示した「戦後日記」とらいてうの写真

太陽光発電問題

全国メガソーラー問題中央集会から

らいてうの家の前の太陽光発電計画は、事業主の動きのないまま新年度を迎えます。

自然エネルギー推進と称して自然、暮らしを壊すメガソーラーの建設が各地で進められ、反対運動が行われています。全国メガソーラー問題中央集会（1月14日、中野ゼロホール）にらいてうの会からも参加しました。メガソーラーには少し足りない大きさとはいえ、「家」の前の太陽光発電計画も決して自然と調和するものではなく、全国の問題に無関心ではられません。

集会での発言を聞くと「日本の国土はソーラーパネルでいっぱいになるのではと危惧される程、広大な森林伐採で地球温暖化対策に逆行するのではないか」「絶滅危惧種のタカ『サシバ』が打撃を受けている」（日本野鳥の会）など、問題山積の現状です。ゲストのアルピニスト（エベレストや富士山の清掃活動を行っている）野口健さんは、各団体、地方自治体の連携が必要と話されました。

集会では経済産業大臣へ「さらなるFIT法改正を求める要請書」を提出することを決定、翌日要請行動が行われました。政府はどのような答えを出すのでしょうか。「家」の前は？

雪解けと共に動き出すと思われる事業者に対して、上田市の条例化が実効性のあるものであってほしいと願わずにはられません。

（植草充代）

「家」地元での活動

2月19日（火）午後1時、米田会長・花岡副会長・杉山の3人で上田市役所へ表敬訪問をし、土屋陽一市長に「あずまや高原太陽光発電計画に関するらいてうの会の要望書」を手渡ししました。忙しい中15分とつてくださり米田会長も胸の思いを吐露することができました。また都市計画課へも行って課長に同じ思いを聞いていただき、条例化への支援をお願いしました。市議会においてよい条例がつけられることを願うばかりです。



藤川まゆみさんとの話し合い

1時半から4時までは男女共同参画センターで上田市民エネルギーの会の藤川まゆみさんと話し合いました。藤川さんは上田市で「相乗り君」という太陽光発電事業を進めている人です。上田市は全国で3番目の寡雨地帯です。また広く日当たりのよい屋根を持つ家が多くあります。その屋根へ太陽光パネルを相乗りさせ、地域に自然エネルギーをふやそうという事業です。その事業と大規模太陽光発電事業とはどこが違うのか、私たちの願いはなんなのか、お互いに話し合ってみる大切さがよくわかりました。私たちも自然エネルギーに反対しているわけではない。その方法・設置条件・場所等をよく考えてほしいというわけです。今後とも研究したいと別れました。

（杉山洋子）

らいてう「戦後日記」デジタル公開

らいてうが1953～58年にA5判の大学ノートに書いた日記を1月15日、会のホームページにデジタル公開しました。<http://rachou.cococ.jp> 日記はらいてうが戦後国際的な平和運動に加わ



説明する米田佐代子会長

り、湯川秀樹らとともに原水爆禁止を求めて活動を始めた時期のものです。国民婦連の副会長を引き受けたいきさつや世界平和アピール七人委員会の活動のころなど興味深い記述がみられます。

日記公開と説明会（1月22日、会事務所）には共同通信社、朝日新聞社、田端文士村記念館から取材があり、朝日新聞、東奥新聞、下野新聞、東京新聞、山梨日日新聞、信濃毎日新聞、静岡新聞、京都新聞、熊本日日新聞、長崎新聞、琉球新聞などに記事が掲載されました。

日記は『紀要第12号』（7月頃発行）に書き起こしを掲載する予定です。

展覧会紹介（らいてうの資料が紹介されます）

田端文士村記念館企画展（5月6日まで）

「恋からはじまる物語」作家たちの恋愛事情

（JR田端駅より2分）

森鷗外記念館（4月6日～6月30日）

「一葉、晶子、らいてう―鷗外と女性文学者たち」
（東京メトロ千駄木駅より5分）

シリーズ 〈新婦人協会の人びと〉

今年2019年は、女性の政治的・社会的権利の獲得をめざして運動した新婦人協会発足100周年にあたります。これを記念して、らいてうとともに会で活動したさまざまな女性たちのプロフィールを連載します。



市川房枝

市川と言えば婦選運動家として知られているが、そのスタートはらいてうに声をかけられて新婦人協会と一緒に始めた時からである。名古屋から上京したばかりのまだ無名の若い女性で、らいてう33歳、市川26歳だった。

市川は自伝の冒頭に「父からげんこつで、ときには薪ぎつぽでなぐられ」る母の姿から「なぜ女は我慢しなければならないのか」と書き、「母の嘆き」が人生の出発点だったとしている。

師範学校を卒業し小学校教師となったが、男教師との月給の差、女だけがお茶のサービスやカーテンの洗濯をするのが納得できず、病気になるのを機に退職し、名古屋新聞の記者になった。記者生活は楽しかったが、1年ほどで上京し、山田嘉吉語学塾に通うようになり、ここでらいてうと知り合った。

1919年8月名古屋新聞社と中京婦人会共催の「夏期婦人講習会」の講師としてらいてうと山

田わかが招かれたとき、市川は案内人となり、会が終わったのちもらいてうが名古屋地方の繊維工場の視察をする手助けをした。このときの市川のときばきとした対応に信頼を寄せたらいてうが、帰京後あたためていた女性団体の構想を相談したのである。

そこへ大阪朝日新聞社から11月24日の「第一回婦人会連合大会」への出席依頼がらいてうにあり、好機として急いで趣意書を起草、名称も「新婦人協会」として、大阪で発表したのが、会の始まりであった。らいてうの構想は大きかったが、とりあえず議会に請願運動をすることになり、賛同者が集まった翌年1月6日の協議会で、「治安警察法第5条修正と花柳病男子結婚制限」に決定した。ここから嵐のような運動の日々が始まった。代議士への陳情、署名運動、支部の結成、会誌の発行、講演会等々。体がいくつあっても足りない日々が続く、心身に不調をきたした市川は理事を退き渡米した。アメリカでは女性たちの運動に学び、帰国後は婦選獲得同盟などで活動が続けたが、戦時下はやむなく女性の地位向上を願って戦争に協力した。

戦後1945年8月、いちはやく在京の女性たちに呼びかけ婦人対策委員会を結成し、政府に婦人参政権を要求、政府は10月閣議決定、12月選挙法が改正された。1953年参議院議員となつて以来、議員としても女性の地位向上に尽くし続け、「平和なくして平等なし、平等なくして平和なし」をモットーに活動し、87年の人生を全うした。

(折井美耶子)

【事務局日誌】

1月7日 新婦人協会100年事業話し合い
1月14日 全国メガソーラー問題中央集会（中野ゼロホール）

1月15日 会ホームページにらいてう「戦後日記」デジタル公開

1月17日 第5回理事会

1月22日 らいてう「戦後日記」公開と説明会

2月5日 日記デジタル化書き起こし紀要会議

2月9日 上田市長に太陽光発電計画に関する要望書を手渡す

らいてう講座・平塚らいてう「平和の夢」の100年 講師・米田佐代子会長、奥村直史さん（東京ウィメンズプラザ）

2月12日 第4回常任理事会

2月19日 上田市民エネルギーの会の藤川まゆみさんと話し合い

3月6日 新婦人協会100年事業話し合い

3月9日 第14回平塚らいてう賞贈賞式（日本女子大）に出席

3月10日 東信メガソーラー問題を考える会

3月14日 第6回理事会（上田市民プラザ・ゆう）

3月29日 日記デジタル化書き起こし紀要会議

平塚らいてうの会事務局は火・木・金の11時～16時開局しています。それ以外のときは

FAX 03-3818-8626

Eメール raichou@nifty.com まい。



あえるような内容をめざします。らいてうの家の企画展示のテーマも「新婦人協会発足100年」。

「家」の大修繕、太陽光発電
築13年を経過したらいてうの家の大規模修繕（外壁の塗装など）の実施と、そのための寄付を訴え

新婦人協会発足100年の今年

——私たちは何を受けつぐか

第20回通常総会ひらく

第20回通常総会が、5月26日に東京ウィメンズプラザで開催されました。米田佐代子会長が主催者挨拶、金輪きみ子事務局長が2018年度事業報告・決算報告、2019年度事業計画・予算案提案をおこない、審議・承認のあと、新役員を選出しました。

新婦人協会100年記念行事の成功を

今年は、らいてうらによる新婦人協会発足から100年。会では3回の連続講座、「家」での講座のほか、関連5団体の共同の取り組みによる記念行事を企画中です。『青鞥』の後、らいてうが、女性の権利獲得をめざして格闘した新婦人協

会の活動から私たちがいま受けつ

ぐものは何か——ともに学び、語り

あえるような内容をめざします。

「家」の大修繕、太陽光発電

築13年を経過したらいてうの家

の大規模修繕（外壁の塗装など）の実施と、そのための寄付を訴え

平塚らいてうの会ニュース

ることを確認しました。（4頁）

「家」の前の太陽光発電問題では昨年8月に上田市長と会見、上田市は条例策定をめざしています。HJアセットマネージメントの動きは見られませんが、地域・全国の皆さんと手を組んで、計画断念、予定地活用をめざします。（3頁）

「家」では、らいてう講座、森のめぐみ講座、昔語り、源氏物語講座など多彩な活動を行いました。昨年の企画展示は「らいてう——愛と平和の85年」。「平塚らいてうとらいてうの家」のDVDも好評です。今年も様々な講座、星空の観察、スノーシューなどに取り組みます。

研究・資料蒐集活動—デジタル公開が話題に

18年度の大きな行事は「平塚らいてう戦後日記」のデジタル公開でした。1月15日に会のホームページに公開、22日に記者発表し、朝日新聞、東京新聞、全国の地方紙に報道されました。

他にも、田端文士村記念館の企画展「恋から始

まる作家たちの恋愛事情」、森鷗外記念館の特

別展「一葉、晶子、らいてう——鷗外と女性文学者

たち」でのらいてうの資料展示、NHK Eテレ

「グレーテルのかまど——らいてうさんのゴマじる

こ」の再放映、NHKラジオアークイブス「声で

つづる昭和人物評伝——平塚らいてう」でのらいて

うの肉声の放送、大月書店『非暴力の人物伝・平

発行
平塚らいてうの会
〒112-0002
東京都文京区
小石川
5-10-20-5F
TEL・FAX
03-3818-8626

塚らいてう』、山川出版社『日本史ブックレット平塚らいてう』の出版など、様々ならいてう関連企画がありました。『紀要 第11号』を発行。らいてう忌は、山口智美さん（米国在住）の講演「改憲の動きと家族・国家」を聴き、日本の右翼勢力の動きを学び交流しました。

会の維持発展のために、会員拡大（とくに若い世代）、財政の安定化は重要課題です。18年度には女性団体等に「家」の宣伝・募金依頼文書を送り、いくつかの反応がありました。引き続き、ホームページの充実、SNSの活用などにより、新たな人びとの間に会と「家」の宣伝を広げることが大きな課題です。（堀江ゆり）

今年度役員

会長・米田佐代子 副会長・井上美穂子、折井美耶子、小林明子、杉山洋子、花岡静枝、堀江ゆり、三留弥生 事務局長・金輪きみ子 理事・青木俊子、飯村しのぶ、植草充代、北澤有希子、木村見江、久野泉、倉橋純子、杳掛美知子、小林典子、竹花みい子、富松裕子、藤原美津子、宮下昌子、山田繁子、若尾伸子 監事・佐久間由美子、中嶋保枝（以上、再任）

『紀要 第12号』 8月発行

らいてうの自己認識・世界認識（奥村直史）／新婦人協会——「花柳病男子結婚制限法」と「拒婚同盟」（折井美耶子）／松代大本営建設当時とその後の松代町で暮らして（富松裕子）／講演記録改憲の動きと家族・国家（山口智美）／らいてう『戦後日記（1953〜58）』 頒価700円



新婦人協会発足100年・連続講座第1回

平塚らいてうと新婦人協会を考える

—今、私たちは何を受けつぐか—

通常総会の後、同じ会場で米田佐代子会長による第1回連続講座「100年前の女の元気—新婦人協会の時代を読み解く」が行われ、約40人が参加しました。

新婦人協会の時代はどんな時代だったのか

1919年は第一次世界大戦終結後のベルサイユ講和条約が結ばれ、国際連盟が発足した年でした。日本は大正デモクラシーの時代であるとともに、帝国主義列強の仲間入りをして、ドイツと共に戦争へ向かう時代でした。現在、嫌韓、嫌中が喧伝されていますが、当時の日本が朝鮮半島や中国を植民地化していったことを今の人たちは知らない、米田会長は指摘します。

新婦人協会の運動の成果とらいてうの葛藤

二児の母となつたらいてうは、女性が母としての役割を全うするためには学び、自覚し、権利を獲得して社会を動かす力を持つべきだと考えるようになりま

す。らいてうによる新婦人協会の「設立趣意書」には、「女性が自ら学び、実践活動を起こす」とあります。ら

いてうにとつて新婦人協会は「母性」＝「働く婦人の権利」「子どもの権利」をめざす場だったのです。

新婦人協会が女性の政治参加を訴え、治安警察法第5条2項修正（政治演説会への参加）をかちとつたことは、大変な成果でした。

その後、女性の政治参加が国策遂行を目的として論じられるようになり、1938年には国家総動員法ができて、戦時下婦人指導者層の戦争協力問題が起こります。国際的国内的に揺れ動く情勢のなかで、らいてうが理想とした運動は構築できなくなっていました。

真に「女性が輝く」社会とは

らいてうの戦争体験は、平和主義の原点でした。私たちはエレン・ケイの「女性の運動は本質的に平和運動」との言葉をどう受け止めるかが大切です。進歩的な勢力の間でも「権利主体としての女性」という考え方が理解されない状況であり、「女性の政治参加」が常に「国への貢献」「戦争協力」という枠組みで取り上げられていきます。現政権の言う「女性活躍」は真に女性の願いを実現する方向ではありません。私たちのこころざし」を改めて学びたいと結んで、お話は終わりました。

「私たちは何も知らない」

お話の後、様々な意見や感想が出されました。イギリスの参政権運動を研究してきた会員からは、日本の運動とイギリスの運動を単純に比較することはできないとの指摘がありました。11月から12月にかけて公演予定の『私たちは何

も知らない—青鞜編集部を舞台にした青春群像劇』（二兎社）を準備している永井愛さんからも発言がありました。「青鞜の時代に20代の女性たちが女性の覚醒を目指し、バッシングを受けながらも濃密な時間を過ごしたことに感動」「今の私たちと変わらない問題として芝居にしたい」

7月には折井美耶子副会長による2回目の講座が行われます。会として今後さらに深めていくことを参加者とともに確認し、講座は終わりました。（飯村しのぶ）

新婦人協会発足100年 イベント準備会発足

新婦人協会発足100年を記念して、らいてうの会は連続講座を開催すると同時に、関連団体との共同イベントをしようと、計画してきました。

4月に4つのゆかりの団体（市川房枝記念会女性と政治センター・主婦連合会・日本女子大平塚らいてう研究会・賀川ハル研究会）に趣意書を届け、共同イベントを企画しようと呼びかけました。そして、5月30日、主婦会館に5団体が揃い、イベント準備会を開くことができました。

「婦人参政権は、マッカーサーのプレゼントではなく、女性たちの運動があったからこそであることを知らせたい」「新婦人協会発足は、1919年11月24日の全関西婦人連合会での趣意書発表だった。この日をイベントの日としたい」「若い人たちへのアピールの仕方を工夫していこう」など、各団体から参加した11人で活発な話し合いをすることができました。（北澤有希子）

らいてうの家 オープン

歌声に包まれて

4月27日(土)、ソプラノ歌手安達寛子さんの素晴らしい歌声に包まれて、14年目の家開き！ピアノスト小林真美さんの弾くピアノも電気ピアノとは思えない豊かな響きを出します。「花の街」「アメイジング・グレイス」から始まって「最後だとわかっていったなら」の曲まで来ると聴衆は皆胸を詰まらせられました。

最後に参加者全員で「花は咲く」を歌いましたが、安達さんの深く響く声に乗せられて、全員自己最高の声を出すことができたようでとても気持ちの良いオープニングとなりました。

恒例のお茶会

その後は毎年恒例の茶会。今年も石州流の方々のお点前でおしくお茶をいただくことができました。朝早くからいらしていただいて、お道具の準備、水屋の準備となかなか大変です。毎年ボランティアでしつらえていただいていて、感謝あるのみです。

米田館長の講演

昼食後、米田館長の講演「100年前の女の元氣―『Me Too』と『家出』の時代」を聴きました。

1919年は第一次世界大戦が前年に終決、ベルサイユ講和条約が結ばれ、国際連盟が発足した年です。100年前のこの時代は大正デモクラシ

ーと言われ、労働運動・農民運動・水平社運動など人権尊重の運動がおこった時代です。そこへらいてうの呼びかけで女性に参政権を要求する会「新婦人協会」が立ち上がったのです。この時代の背景がていねいに語られ、歴史認識を新たにしました。

またこの時らいてう等の主張した「女性の自立」「性の尊重」は、現在実現しているのでしょうか？参政権は実現したけれど100年たってもかわらない差別意識は様々な事件を引き起こしているのではないのでしょうか。

星空観察会にお出かけください

この日の歌手安達寛子さんは、8月2日の星空観察会にも参加して歌ってくださいることになりました。ホール全体に響き渡る素晴らしい歌声に、もう一度包まれてみませんか？

午後4時までにお出かけください。

(杉山洋子)



太陽光発電問題、上田市が規制条例策定へ

太陽光発電設置問題で、これまでの市の指導要綱やガイドラインでは法的拘束力不十分として立地規制条例早期制定を求める運動が広がり、上田市は有識者による条例検討会を開催、「上田市太陽光発電設備設置の適正な立地に関する条例(仮称)骨子案」を発表して市民・関係者からの意見を募集しました(5月20日締切)。平塚らいてうの会をはじめ、らいてうの会員も一人ひとり4年間の思いをこめて意見を出しました。

その結果、6月10日開会の上田市議会に、「太陽光発電設備の適正な設置に関する条例案」が提出されました。条例案では、対象を市で定めた配慮が必要な「抑制区域」内での面積1千平方メートル以上で発電出力50キロワット以上の計画で工事の前に市との事前協議、住民・関係者への説明会等を必要とし、市長との協定締結も義務としています。住民合意がない場合には着工に同意しないこともありうる内容です。

らいてうの家エリアの事業者は、一昨年の説明会以来一年半も連絡がなく、問い合わせても返答がないなど、不誠実な対応です。ここは、代々の村長、町長が書き残しているように自然ゆたかな保養地として守ってきた地です。私たちは素晴らしい自然環境の中に生息する動植物を守って来ました。地元大日向区の区民のみなさんもこの条例の骨子案について関心をもっております。

上田市議会において、市民の意見が建設的に反映することを期待しています。

(真田らいてうの会会長 花岡静枝)

シリーズ「新婦人協会の人びと」



賀川 ハル

ハルは賀川豊彦の妻として知られるが、一人の女性としてさまざまな社会的な活動を行い、94歳の人生を全うしたことはあまり知られていないのではないだろうか。

ハルは横須賀で小間物屋を営む芝房吉、むらの長女として1888年3月に生まれた。らいてうより2歳下である。家が三度も火事にあい、ハルが小学校を卒業するころには生活が苦しくなり、女中奉公に出た。その後一家で神戸に転居、ハルは福音印刷工場の女工となった。そこで体験するさまざまな出来事が、ハルの人間性を豊かに育てた。この工場ではキリスト教の礼拝があり、ある日賛美歌の指導にきた若い賀川豊彦の説教にハルは感動した。その後伝道にも参加し、やがて洗礼を受け、のち豊彦から求婚され、1913年25歳で結婚した。豊彦は自伝『死線を越えて』のなかで結婚する前のハルのことを「小さい事にまで気が付く」「意志の堅固な賢い女」と評している。

新居は神戸新川の「貧民窟」で、そこに住む貧しい人びと、なかでも病人の世話をハルは懸命に行った。1914年夫婦は勉強し直すことを決意し、豊彦はプリンス頓大学にハルは横浜の共立女子神学校に入学した。3年間の別居生活のの

ち、再び新川に戻って生活を始めた。

1919年11月、平塚らいてうは大阪での新婦人協会結成の報告をしたのち、神戸の賀川を訪ねた。「南京虫に責められて貧民窟の雷鳥女史」とその動向が東京朝日新聞(19・11)に載っている。そのときハルは初めて平塚に出会った。

翌20年2月、新婦人協会神戸支部の結成に際しハルは会に入会、豊彦も準会員となった。21年2月治警法5条撤廃のための「覚醒婦人大会」開催にあたって支部長との間に行き違いがあり、会は成功裡に終わったが、ハルはその後長谷川初音とともに組織した「覚醒婦人協会」に力を入れるようになる。又この年4月、豊彦の発案で神戸消費組合(神戸灘生協の前身)を立ち上げ、ハルは主婦のための家庭班をつくった。

1923年9月の関東大震災で被災した人びとの救援のため、10月一家を挙げて上京した。豊彦は義援金を集めるために全国を廻り、その激務のため発病し、静養のため世田谷・松沢に転居、ハルの献身的な介護で快復した。その後、神戸に転居したが、ふたたび松沢に戻りここが終生の棲家となった。1945年3月の東京大空襲で、豊彦の関係する社会事業のほとんどが焼失した。

戦後、豊彦は内外の伝道に忙しかったが、ハルも1955年アメリカ伝道旅行が実現、在住邦人への伝道に力を尽くした。1960年4月豊彦は永眠。豊彦の事業はハルが受け継いだ。1981年93歳で、東京都名誉都民になったが、翌年5月ハルは三人の子に囲まれ「ありがとう」の言葉を残して永眠した。

(折井 美耶子)

【事務局日誌】

- 4月5日 森鷗外記念館内覧会出席
- 4月14日 らいてうの家大掃除・オープン準備
- 4月15・16日 らいてうの家展示準備
- 4月15日 上田市に「家」開館のあいさつをする
- 4月18日 第5回常任理事会
- 4月27日 らいてうの家オープン
- 5月2日 新婦人協会100年事業会合
- 5月10日 葉草の森りんどう開山式出席
- 5月16日 第7回理事会
- 5月17日 2018年度会計監査を受ける
- 5月26日 第20回通常総会(於東京ウイメンズラザ)第1回理事会
- 新婦人協会発足100年連続講座第1回「100年前の女の元氣」

5月30日 講師・米田佐代子会長
新婦人協会100年事業・5団体合
(主婦会館プラザエフ)

6月1日 あずまや高原自治会総会に出席

らいてう講座「新婦人協会―100年前のらいてうと仲間たち」

折井美耶子副会長(於らいてうの家)

6月11日 第2回理事会

らいてうの家初めての大改修

「家」の外壁と屋根の塗装をする大改修が5月末から進んでいます。「家」は平常通り公開しています。大改修のためのご寄付をお願いします。



おぼろけの会ニュース

森の講座 特別学習会(6月30日 らいてうの家)

太陽光発電事業の現状と課題 佐久裕司



講師佐久裕司氏(元富士見町議)は、「太陽光発電なら何でもよいわけではない」と、住民運動によりメガソーラー計画の阻止、富士見町の条例作りに貢献してきました。

太陽光発電は岐路に

FIT法(固定価格買い取り制度)は、高コストの太陽光発電を普及するため20年間一定価格で買い取る制度です。初年度は40円の高価格でスタート。高価格のため投機目的の金融商品となり、各地での乱開発が問題になっています。様々な問題からFIT法は廃止が検討されていますが、転売等、まだまだ課題が多く残っています。

また、太陽光パネル設置が引き起こす災害も頻発しています。東京青梅市や奈良県などの急斜面にパネルが設置され、夏には草ぼうぼうとなり、山火事の恐れがでています。姫路市では、西日本豪雨でパネルが崩落しました(台風でパネルが発火、火事になった例もある)。パネルは壊れても発電し、壊れたパネルからは基準値以上のセレ

ン、鉛などの有害物質が検出された事例もあります。しかし、企業側はその内容を明かしません。2018年に太陽光発電業者の倒産件数は過去最多になりました。

上田市で条例成立!

森林を伐採して再生可能エネルギーを生み出すというが、森林そのものが自然エネルギーです。日本の国土の八割は森林で木質バイオマスの有効利用ができます。森を整備してエネルギー持続可能な社会をどうつくってゆくかを考えなければなりません。特別景観区域と景観条例があれば、太陽光のみではない再生可能エネルギーを目指すことができます。上田市では、6月議会で「太陽光発電設備設置事業の適切な立地に関する条例」が成立(8月1日施行)しました。大きな前進です。

佐久さんからは「らいてうの家の前の太陽光パネル設置反対」運動について、「日本では環境権が視野に入らず、財産権も公共の福祉のため制限されるという点が不徹底だった。現在太陽光発電は「儲かる」という点ばかり目につくが、事態は大きく変化している。今一番大事なのは、この土地の自然や景観、地域の歴史的文化的価値を守り、イヤだと言いつづけることです」と私達の運動を励ます力強いご助言もいただきました。(植草充代)

発行
平塚らいてうの会
〒112-0002
東京都文京区
小石川
5-10-20-5F
TEL・FAX
03-3818-8626

〈新婦人協会100年記念のつどい〉

女性の無権利な状況を変えようというたちがよびかけた「新婦人協会」の活動は、女性の参政権や人権確立を求める運動に引き継がれ、今日の#Me Too #With Youにつながるものといえます。この運動から私たちが受けつぐものは何か—このテーマを軸に、「協会」ゆかりの5団体共催で「記念のつどい」を開催します。

らいてう、市川房枝、奥むめお、賀川ハルと私たちをつなげる〈孫世代〉のトーク、参加者のトーク、企画展示も…ご参加をお待ちしています。

(新婦人協会発足100年記念のつどい)

女性たちが社会を動かし、法律を変えた —#Me Too #With Youにつながる100年前の運動

11月24日(日) 13時半～主婦会館プラザエフ

参加費500円 申込み fax03-3221-7864 主婦連

☆基調報告 折井美耶子(平塚らいてうの会副会長)

☆トーク 奥村直史、河村真紀子

富澤康子、久保公子

共催 市川房枝記念会女性と政治センター

賀川ハル研究会

主婦会館 主婦連合会

平塚らいてうの会

先着150名

新婦人協会発足100年連続講座

—らいてうと新婦人協会を考える—

第2回『女性の政治的権利を！』

第25回参議院選挙まつた中の7月7日、東京ウィメンズプラザで、折井美耶子副会長による第2回連続講座が行われ、33名が参加しました。

女性も政治活動を行っていた

明治の自由民権の時代、日本各地で活動していた女性がいたと折井さんは言います。高知では女戸主に選挙権がないことを県や国に不服申し立てをし、「民権ばあさん」と呼ばれた楠瀬喜多。最初の女性弁士として各地を遊説した岸田俊子。しかし、明治国家が確立し、大日本帝国憲法が公布され集会及び政社法により、女性の政治活動は禁止されるようになります。

新婦人協会設立へ

恋愛・結婚・出産・育児を経て母性の問題に目覚めたらいてうは、与謝野晶子らと母性保護論争を展開、女性の立場から社会改造の運動をする決意をします。1919年秋、33歳のらいてうは26歳の市川房枝に声をかけます。大阪中之島公会堂で開催された第1回婦人会関西連合大会で、新婦人協会設立の趣旨書を配り、協力を求めました。

翌年、田端のらいてう宅での初会合には奥むめおら16人が参



加。3月上野精養軒での発会式には男性を含む70余名が参加しました。

治安警察法第5条改正に成功

治安警察法第5条改正と花柳病男子結婚制限法の請願を決定、忙しい活動の日々が始まります。議員への陳情、署名活動、広報活動、機関誌『女性同盟』の発行など、らいてうと市川の負担が大きいものでした。活動は実を結び1922年に治安警察法第5条第2項改正に成功、同年12月にらいてうの意向により新婦人協会は解散しました。

新婦人協会がもたらしたもの

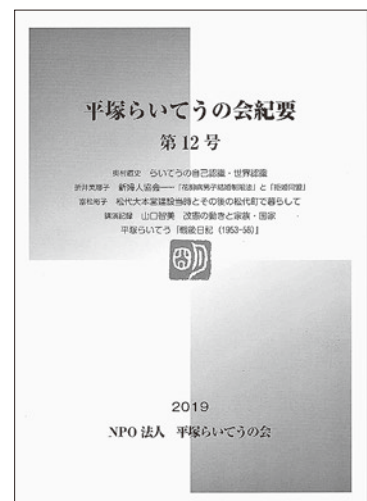
第5条改正の成功はその後の婦人参政権運動に道を開き、昭和初期には活発な婦選運動が展開されましたが、第二次大戦により中断。戦後1945年8月25日、市川らは戦後対策婦人委員会を発足、婦人参政権の要望書を内閣へ提出。幣原内閣の初閣議で婦人参政権の実現が閣議決定されました。

晩年の市川の聞き取りをした折井さんは「婦人参政権はマッカーサーのプレゼントという通説は残念。戦前から婦人が苦勞して獲得したもの。おろそかにしてはいけない」との貴重な言葉を受け取ったと言います。「選挙権は義務でなく権利、ぜひ投票を」と、折井さんは訴えました。

講座には、折井さんと共に『新婦人協会の研究』を書いた「女性の歴史研究会」の方々、折井さんが長く講師を務めている「八千代らいてうの会」の方々も参加し、発言がありました。折井さんは「地域女性史、女性の歴史を掘り起こすことの意味は大きく、新たな資料が出てくる可能性がある」と応えました。

(飯村しのぶ)

紀要第12号刊行



奥村直史さんに寄稿いただいた「らいてうの自己認識・世界認識」は、らいてうの宗教的な叙述を読み込み、「戦争だけが敵」と訴え続けたらいてうの根本には「神の分け御霊」という自己存在の発見、20歳の時の見性体験があったのではないかと問いかける論考です。

折井美耶子副会長の「新婦人協会『花柳病男子結婚制限法』と『拒婚同盟』」は、らいてうが花柳病問題に取り組んだ理由を「拒婚同盟」も含めて考察したものです。

富松裕子さんの「松代大本営建設当時とその後の松代町で暮らして」は、第二次大戦末期、本土決戦に備えて建設が進められた松代大本営地下壕で発見された朝鮮人名簿を読み込み、当時の記憶と現代の課題についてまとめたものです。

「改憲の動きと家族・国家」は、昨年6月のらいてう忌での山口智美さん講演の記録です。巻末には今年1月にデジタル公開した平塚らいてう『戦後日記(53-58)』の全文書き起こしを収録しました。米田佐代子会長が解説しています。

(飯村しのぶ)

森の講座 6 / 30交流会 7 / 1信州薬草譚



7 / 1 薬草園 左が小川康氏

第一日目。梅雨まつただ中であいにく朝からの雨降り。笹刈りは中止とし、らいてうの家がどんな願いのもとで建築されていたか、「家」へのそれぞれの思い等を語り合いました。

22名が参加。地域の木材をどのように工夫して集めたか、当時の苦労、木を使わせたもたらした自然へのお返しとして森に木を植えることが提案されたこと、実際に植樹した時のこと、今その木々が育っている現状などが話されました。

「初めて聞いた話も多かった」「その当時の苦労を思い出した」等、これからの家の活用や森の維持、自然への思いを新たにしたいときでした。

二日目は小川康さん（森のくすり塾主宰）のお話を聞きました。雨上がりの緑が気持ちよい午前中、小川さんのお話を聞きながら薬草園での自然との出会いを満喫しました。16名が参加。

小川さんは「森」がくすりで「くすり」が森、のんびりと自然にふれて過ごすこと、それこそが薬と言われました。それは「らいてうの家が目指すものと同じだ」と思いました。別所温泉野倉にある小川さんの薬房のキャッチフレーズが「人と人 人と森 人とくすりが出会う場所」。小川さんは、チベットでの生活から、チベットには草木に名前がない、名前でなくその姿で必要性を知

る、生活に根ざした物には必要に応じて名前があると話されました。参加者のひとり山形生まれの杉浦さんの、「山形ではなにながあつても薄荷水（はっかすい）」の話に小川さんとの共通点があり皆で納得。小川さんは、300年かかって築き上げた越中富山の伝統薬を大事にしていること、さらに今回のらいてうの会との関わりで、富山出身の尾竹一枝との出会いに感動したことも話されました。

その後、参加者で薬草園をまわる中で「本当は自然の中でこれらの植物を見分けられること」と。「何かあったときの薬箱はキハダ」と昭和50年代にこの薬草園に「キハダの森」を作った、薬効は地元の人が一番よく知っている、地域の人が今も大事にしていることが本場に大事なことで、とも話されました。難しい薬の成分のカタカナ語はどこかにとんでいってしまったけれど、すべてのお話がとても楽しく「目から鱗」の話もたくさんありあつという間の2時間でした。（若尾伸子）

「家」建設こぼれ話

「宇宙のチリが渦を巻いて集まり、星になるように出来上がった家なんです」と語る、9人の設計士の一人、小林典子さんにお話を聞きました。



2003年1月に林業会館で、設計アドバイザを引き受けてくださった東京の中央設計の永橋為成さんによる「家」建設説明会が開かれ、「地元の女性設計士の方に」という話がありました。建築士会の理事をしていた小林さん

は、上田、真田地域の20名を超える女性建築士全員に電話をかけたそうです。是非と名乗り出る方、らいてうさんの「私は永遠に失望しない」の言葉に勇気づけられて参加を決める方など、8人が集まりました。雪の多い地でもあるので、構造設計の専門の方も一人加えて9人になりました。予想以上の人数に小林さん自身は驚きましたが、永橋さんは、「理想的」と絶賛。その言葉に後押しされて、「らいてうに会い、やすらぎ、語り合う『家』をつくっていく」という確認をし、9人で設計にとりかかることになりました。

永橋さんの提案から9人の女性建築士が出会い、生まれたのが、「アトリエ模プロジェクト」だったのです。永橋さんは、家完成までコーディネーターとして、大きな力となってくれました。設計案は、全国から「私の提案カード」で意見をつのり、みんなの参加で作っていききました。「自然を大切にしたい家」というスタートから、「長野県産の木、できれば、真田町近辺の木」と夢が膨らんで行きました。きっかけは「国産の木を使わなくなったから山は荒れ放題」という地元の林業士熊崎一也さんの話でした。小林さんは時間を見つけては熊崎さんと一緒に山に入り、使えそうな木に目印のテープをつけ、材木準備にも関わりました。切り出した木材は第三木材が休み返上で乾燥・製材をひきうけてくれました。

玄関ポーチの柱は、らいてうの庭のアカマツをそのまま利用し、地元の木を使うために知恵や力を出しあつてできた「らいてうの家」にふさわしいものとなっています。（北澤有希子）

シリーズ「新婦人協会の人ひと」



奥 むめお

奥むめおは、主婦連会長として、そのシンボル・おしゃもじとともに長く消費者運動を続けた人として知られているが、その社会的活動のスタートは、新婦人協会だった。

むめおは、福井市で1895年10月24日、鍛冶屋を営む父和田甚三郎、母はまの長女として生まれた。戸籍名は和田梅尾だが、父は片仮名でムメオと書き、本人もムメオとしていた。むめおは、ペンネームとして使うようになったという。

跡取りとしてやむなく家業の鍛冶屋を継いだ父は、勉強できなかった無念を子に託し、「しっかりと勉強せい」と子どもたちに言い、「女だから」と差別しなかった。むめおは福井県立高等学校に進学、この学校には『青鞥』の同人である上野葉子先生がいた。しっかりとした評論を書く女性である。こうした新しい息吹を受けたむめおは、日本女子大家政科に入学した。しかし女子大の授業は良妻賢母的で興味が持てず、図書館にばかり通っていた。卒業後は女子労働問題に関心をもち、「女工になろう」と決心、本所の富士瓦斯紡績に学歴・姓名を偽って入った。しかしあまりに酷い労働環境に抗議をし、10日で首になった。このことが話題になり、労働問題の会合などと呼ば

れるようになった。

こうした日々の中で知り合った奥栄一と結婚。

奥は和歌山の出身、詩人だったが堺利彦の売文社の翻訳係をしていた。貧しいながらも楽しい新婚生活を送っていた1919年の年末、平塚らいてうが突然訪れ、「新婦人協会を手伝って欲しい」と。当時妊娠中だったむめおは固辞したが、栄一の熱心な勧めもあり参加を決め、翌年3月の発会式では、らいてう、市川と並んで理事に就任した。むめおは生まれた子どもを背負い活動に参加し、らいてうとも市川とも違う持ち味で会を支えた。治警法改正案が貴族院に上程されたとき、藤村義朗議員の反対演説で否決になり、この藤村男爵を説得するために坂本真琴とともにねんこ姿で藤村邸を訪問、これに感動した男爵が賛成に回ったというエピソードは有名である。

市川が渡米し、らいてうが静養に専念するなかで、むめおは協会を支え続けた。治警法改正後、協会は解散。むめおは生活に密着した運動をと、平凡社の下中弥三郎の後援を得て、職業婦人社を設立、『職業婦人』を創刊。だが関東大震災で焼失した。栄一の故郷紀州に疎開し、そこで生まれた女兒は「紀伊」と名づけられ、のち母の運動を継ぐ人となった。1947年「台所と政治を結ぶ」をスローガンに戦後初の参院選挙に出馬し、当選する。以来、3期18年間消費者の代表として活躍。不良マッチ追放運動など主婦たちの声を反映する運動を続けた。1948年結成された主婦連の会長に就任。1997年7月7日永眠。101歳の長寿であった。

(折井美耶子)

【事務局日誌】

6月30日 森の講座 太陽光発電特別学習会

講師・佐久裕司さん(於らいてうの家)

7月1日 信州薬草譚 講師・小川康さん

(於薬草の森りんどう)

7月2日 新婦人協会100年事業・実行委員会

(於主婦会館プラザエフ)

7月11日 第1回常任理事会

8月1日 新婦人協会100年事業・実行委員会

(於主婦会館プラザエフ)

8月2日 らいてう講座② 星を見る会

講師・塩沢崇さん(於らいてうの家)

8月4日 あずまや高原自治会懇親会参加

(於薬草の森りんどう)

8月10日 平塚らいてうの会紀要第12号発行

8月21日 婦団連「戦争はごめん女性のつどい」

参加、書籍等販売

8月31日 らいてう講座③ 野口体操を体験して

みませんか 講師・奥村直史さん

(於らいてうの家)

9月12日 第3回理事会

9月27日 新婦人協会発足100年記念のつどい記者

発表・実行委(於主婦会館プラザエフ)



らいてうの家大改修終了

外壁のガラスコート仕上げで、きらきらしているらいてうの家です。ご寄付も集まってきています。ありがとうございます。



思い起こすのは、平塚らいてうが戦後大国の核実験が繰り返されるなかで、「今年こそ」と訴え続けた「平和への祈り」です。「婦人は参政権を得て10年、この参政権を平和と民主主義のために」（56年「年頭の所感」）、「政治家が力の平和政策を捨てねばならない時が来た」（58年「今年こそわたしの念願が達せられる年としなければならぬ」、「わたしたちが何をしてもまず取り組まねばならないのは核実験の全面停止」（59年「今年こそ核実験停止を」、「軍備全廃

らいてうの「平和への祈り」にこたえて
平塚らいてうの会会長 米田佐代子

2020年はどんな年になるでしょうか。東京オリンピック・パラリンピックの成功を期待したいと思いますが、一方で「福島は安全」と言っている誘致した約束はどうなるのでしょうか。ローマ教皇が来日、長崎と広島で強く「核廃絶」を訴えたことにも日本政府はほとんどこたえようとしていません。NPT再検討会議も開かれる今年こそ、わたしたちは原発反対と「核兵器禁止条約」への日本政府の署名批准を求めて運動しなければ、と思います。

が今日の世界が当面する『夢でない現実』（63年「世界の婦人の祈り」）、「日本がいずれの大国にも支配されず、すべての国となかよくしていける道を切り開くこと」（66年「最後の拠点は第九条」）…。そのねがいが毎年裏切られ続けてもらいてうはめげず、原水爆禁止運動や母親大会に集まった女性たちに、日本の婦人運動の「第二の夜明け」を見出します。それは「都市といわず農村といわず、家庭の婦人も職場の婦人も、自分たちの問題をお互いの協力で解決しようとする小さな集団がいくつも自発的に生まれ」「婦人共通の願い達成のため大同団結する方向に進んでいる」からです。「わたくしは永久に失望しない」（56年「庶民の中に生まれる力」という言葉はここから生まれました。

昨年、「新婦人協会100年」の節目に当たって市川房枝記念会女性と政治センター、主婦連合会、主婦会館、賀川ハル研究会と平塚らいてうの



大規模修繕を終えたらいてうの家

おぼろけの会ニュース

発行
平塚らいてうの会
〒112-0002
東京都文京区
小石川
5-10-20-5F
TEL・FAX
03-3818-8626

公開された「らいてう日記」 を読んでみませんか

『平塚らいてう戦後日記1953-58』はらいてう日記の中で唯一公開された生資料です（らいてうの会『紀要第12号』に全文収録）。戦後らいてうがどんな思いで国際婦連や母親大会にかかわり、原水爆禁止の声をあげていったか、その間にとくさんの俳句を詠み、旅に出ては自然の中で暮らしたいと願うらいてうの肉声を聞いてみましょう。

日時 2020年2月22日（土）午後1時半より

会場 平塚らいてうの会事務所

（東京メトロ茗荷谷駅5分、播磨坂入る）

参加費 無料（人数に制限がありますので事前に会までお申し込みください—fax 03-3818-8626）

会の共催で行った記念行事は大きな成功を収め、らいてうのころざしが現在に生きていることを実感しました（2・3面参照）。

また多くの方々からのご寄付を得て「らいてうの家」の大規模修繕を実施できたことも「協同」の成果です。その後台風のため倒木の被害に遭いましたが奇跡的に建物は無事でした。伐採の費用を含めてご寄付のお願いを継続中です（別紙の「報告とお願い」参照）。

今年は、昨年の「らいてう日記」公開に続いて「らいてう資料」のデジタル化に取り組み、「らいてうのねがい」をさらに深めたいと思っています。大変な時代ですが、後ろを振り向かず一歩ずつ歩いていきましょう。

新婦人協会100年記念のつどい

女性たちが社会を動かし、法律を変えた

Me Too # With You につながる100年前の運動



「つどい」は11月24日、主婦会館で開催され、133名が参加しました。

実行委員長の米田佐代子会長は「1919年、日本では民主運動が広がったが、朝鮮では三一運動が、中国では五四運動が起き、日本が他国を支配、侵略する動きがあった」「新婦人協会が目指したものは何か。先駆者たちの孫世代が祖母の時代を受けつぎ、5つの団体が共同でつどいを開催することを喜び、成功させたい」と、挨拶しました。

100年前の運動をどう受けつぐか

折井美耶子副会長が基調報告を行いました。2つの請願運動や『女性同盟』の刊行等、新婦人協会の活動は多忙を極め、1922年12月、解散します。しかし、運動がもたらした意味は大きいと折井さんは指摘します。



1930年に第1回全日本婦選大会が開催されましたが、戦争により運動は中断します。戦後、いち早く女性の参政権を確信した市川房枝らは「戦後対策婦人委員会」を立ち上げます。46年4月の衆院選で女性たちは初の選挙権・被選挙権を行使し、女性議員39人が誕生しました。47年には奥むめおが、53年には市川が参議院議員となりました。今年の参院選で当選した女性議員は28人です。100年前の運動を受けつぎ、平和で人間らしい生活を目指してどう運動していくか話し合いたいと、折井さんは呼びかけました。

*

ここまでの司会由市川房枝記念会の金子幸子さん。後半は、100年前の先駆者たちの孫世代によるトークです。

堀江ゆり副会長を司会に、らいてうの孫の奥村直史さん、賀川ハル研究会の富澤康子さん、奥むめおの孫で主婦連合会の河村真紀子さん、市川記念会理事長で市川房枝の最晩年の秘書を務めた久保公子さんに語っていただきました。

奥村直史さん —らいてうの家族—

当時、らいてうは33歳、博史は29歳、曙生は3歳、敦史は2歳。田端の家の2階がらいてうの書斎であり事務室でした。おかあちゃん子の敦史は階段の下で母を待ち、博史はアトリエでデッサンに打ち込む毎日でした。収入のない博史を批判する市川に「博史は徹底したエゴイスト」「生活のための労働を強制することはできない」と、らいてうは答えたそうです。

富澤康子さん

—賀川ハルのキャリア形成とリカレント—

ハルは女中奉公や女工を経験し、路傍伝道を行い、キャリアを形成した有能な実業家でした。女性労働の権利を主張し、1921年に覚醒婦人協会を設立します。

1955年、67歳で初めて渡米し、4か月間、125回の講演を行いました。夫豊彦が亡くなり、ハルは20年間運動を続けた後、次の世代へと引き継ぎます。ハルの生き方は、現代日本の女性の生き方やキャリア形成に貴重な提案となると、富澤さんは言います。





河村真紀子さん

—女性の暮らしの困難さに寄りそう運動家—

日本女子大を卒業したむめおは24歳で女工を体験し、「安い前借で、黙々と働く娘たち」に「胸をつかれた」と書いています。新婦人協会に参加したことは婦人運動ひとすじに生きるきっかけとなりました。

しかし、生活に追われる女性たちは演説会に行かず、無関心です。大衆とともに貧乏の退治、無知の退治をし、婦人参政権が欲しい、政談演説を聞きたいと思うような生活の基盤をとの思いが、家庭経済運動、消費者運動へとつながっていきます。「地球経済が変わり、分断の時代に、個人がゆるやかにつながる社会運動を」と、河村さんは問題提起をしました。

久保公子さん

—市川房枝が遺したものの、受けつぐもの—

1962年に竣工した婦人会館の玄関の銘板には「婦選は鍵な

り」「元始女性は太陽であった。」と刻まれています

1975年の国際婦人年を契機に、婦選会館は女性団体の連帯と活動の拠点となり、市川は超党派団体をつなぐ役割を果たしました。

「平和なくして平等なし 平等なくして平和なし」という

言葉を市川は残しました。8万点の資料を有する市川房枝記念会女性と政治センターは、女性議員の比率を高める運動や政治教育を活発に行っています。

会場からは次つぎと発言がありました。

「若い世代と併走をし、国会議員への働きかけ、省庁への要請など、声を上げることが大事」「セクシャル・ハラスメント禁止の法整備を」「#Me Too #With You の運動など、女性の意識が変化している」…



最後に主婦会館理事長の石岡克敏さんが「市民運動の拠点の提供、知的資産の整理管理、次世代への継承は主婦会館の使命。再び集まれたのは歴史的なこと。今後の運動についても、議論していきたい」と挨拶し、つどいは終わりました。

(飯村しのぶ)



会場内の展示も充実

昔語りの会

「郷土の未来を託す

子どもたちを育む食

—学校給食に関わって過ごした人生

—中学校の実践と共に—

講演をしてくださった市場祥子先生は、上田市出身です。真田中学校を皮切りに、管理栄養士として長年学校給食にたずさわってこられました。全国学校給食協会の会長も歴任し、現在も精力的に食育活動に尽力されています。

長い間の経験豊富なお話を聞くことができました。まず、健康の3原則である「食事・運動・睡眠」の調和をとることが、食育の基本であり、朝食をしっかりと食べさせ、睡眠の大切さを教えていくことは、家庭の大事な役割だということでした。そして、学校給食の役割は、栄養バランスはもとより、安心、安全の食品の選択です。市場先生は、地産地消をモットーとして、生産者への感謝の気持ち育てる旬の食材を用い、郷土食、日本型食、個別対応（アレルギー）などに心がけた献立にしてきたそうです。

今は、子どもだけでなく大人も朝食をぬく



9月28日 らいてうの家

人が増えていると聞きます。朝食は一日の大切なエネルギーです。私達も食を大切にしたいきましょう。(松沢愛子)

新婦人協会発足100年連続講座

「らいてう」新婦人協会を考える

第3回「花柳病男子結婚制限法が

意味したこと」

9月15日、エデユカス東京で折井美耶子副会長による第3回連続講座が行われ、35名が参加しました。

らいてうの性的道徳観と新婦人協会の運動

花柳病とは、当時蔓延していた梅毒や淋病などの性行為感染症のことです。10代で遊郭に売られた娼妓が男性客からうつされることがよくありました。花柳病は女性の不妊の原因にもなり、社会にとっても大問題でした。

1916年に「男女性的道徳論」と題して「性病男子から結婚資格を奪い母性の権利をただしい」と書いたらいてうの思いは、新婦人協会のもう一つの課題である「花柳病男子結婚制限法」の運動へとつながっていきます。議員への陳情のために東京中を走り回り、全国の各支部との連絡をとるなど、体力的にも大変な運動でした。第42議会に請願書を提出すると、分科会で審議され政府への参考交付となります。

大正デモクラシーの時代にあつて、新聞各社の受け止めはおおむね好意的なものでした。「花柳病男子」を「花柳病者」に変更した請願署名は数多く集まり、女性たちの大きな賛同を得ました。



新婦人協会の運動から100年経って、日本の状況はどうかと折井さんは問いかけます。

「戦後『家制度』は解体したが、意識や慣習として性のダブルスタンダードが厳然として存在している。過去の問題でなく、まさに今の問題なのではないか」と。

Me Too # With You につながる運動

折井さんのお話を受けて、会場からも様々な発言がありました。「形式とはいえ刑法に墮胎罪が残っている」「産む・産まない・いつ産むかは女性を選ぶことが世界の流れ」「女たちがイニシアティブを握ることで性のダブルスタンダードが是正できるのではないか」などです。

おわりに、堀江ゆり副会長が11月24日の「新婦人協会100年記念のつどい」への参加を呼びかけました。

「つどい」では折井さんの基調講演と、らいてうの孫世代の方々によるトークを通じ、100年前の運動を今につなげ、問題を共有することを期して講座は終わりました。

(飯村しのぶ)

『紀要 第12号』

「らいてう日記」における表記についてのご指摘をいただき、次のように訂正します。

28ページ 下段 末梢→抹消

38ページ 下段 観●梅→臥龍梅

42ページ 下段 slope → stope

(注 電報や電信で終止符を意味するstopの誤記)

conservative → conservatorio の誤植

Anglola Minilla → Angiola Minella の誤記

45ページ 上段 ●●→神庭

50ページ 上段

МОСКВА, К—104, ул., ЛУШКИМА, 23, КСЖ

→Москва, К—104, ул. ПУШКИНА, 23, КСЖ

(注 ПУШКИНАの誤記)

54ページ 上段 ●●→不足

62ページ 上段

川田恭子→川田泰子(注 川田泰代の誤記)

【事務局日誌】

9月28日

昔語り「郷土の未来を託す子どもたちを育む食—学校給食に関わって過ごした人生—中学校の実践と共に」

講師・市場祥子さん(於らいてうの家) 第2回常任委員会

10月10日

10月31日

「らいてうの家」大掃除・反省会

11月2日

展示収納作業・「家」冬季休館

11月14日

第4回理事会

11月19日

新婦人協会発足100年記念のつどい実行委員会(於主婦会館)

11月24日

新婦人協会発足100年記念のつどい「女性たちが社会を動かし、法律を変えた #Me Too #With You につながる100年前の運動」(於主婦会館)

12月12日

第3回常任委員会

平塚らいてうの会ニュース

発行
平塚らいてうの会
〒112-0002
東京都文京区
小石川
5-10-20-5F
TEL・FAX
03-3818-8626

「ジェンダー平等がつくる平和」の時代

平塚らいてうの会会長 米田佐代子

戦後75年、「戦争のない世界」を求めて

新型コロナウイルスの一刻も早い収束を願っています。それなのに悪化する国民生活に目を向けず、人権侵害のおそれがある「特措法」、「検察官定年延長」や「自衛艦中東派遣」を強行する政権には憤りを禁じえません。被爆国の日本政府が核兵器禁止条約に署名さえしないのも許せない。

今年は戦後75年、原爆投下からも75年、NPT再検討会議に合わせてニューヨークで開催予定だった原水爆禁止世界大会が「コロナ」の影響で中止されたのは残念ですが、5月の第21回総会では、らいてうのねがいであった「核も戦争もない平和な世界」をつくるために何をしたらいいか、話し合ひましょう。ぜひご参加ください。

来年は「らいてう没後50年」

少し気が早いけれど、来年は「らいてう没後50年」です。生前のらいてうを知る人も少なくなりましたが、らいてうは「過去のひと」ではありません。昨年は「新婦人協会100年」のついで、100年前にらいてうたちが立ち上がり、現

在につながる「女性の権利」獲得のさきがけとなつたことを学びました。今年はその引き継ぎ、

「らいてうのことをもっと知ってもらおう」ためにも戦後彼女がめざした

「平和」について考えたいと思います。

らいてうは、第一次世界大戦を経験し、子育てする中で「一国の利益のための軍備を捨て、世界民になろう」と呼びかけました。トランプ大統領や安倍首相に聞かせたい。そのらいてうが「女が無権利で本当のことを知らず、戦争に反対できなかった」ことを愧じ、「戦後主権者となった女性には戦争を止めさせる責任がある」と自覚したのが戦後の出発点でした。平和の訴えを男性に任せず、「いのちを生む性である女性自身が、いのちを守るために声を上げなければならない」という信念はそこから生まれたのです。

ほんとうの「ジェンダー平等」めざして

日本は、ジェンダーギャップ指数が153か国のうち121位（アラブ首長国連邦とクウェートの間）とこれまでの最低です。しかも自民党の女性議員が人権無視のヤジを飛ばし、女性法相が首



大修繕後のらいてうの家

相の「言いなり」答弁連発とあつては、世界の潮流「ジェンダー平等」の道は遠すぎます。

わたしは10年前NPT再検討会議に向けた要請行動で各国女性との交流集会に参加した時、「平和とは子どもに学校、ホームレスに住む家、病人に病院があること」であり、それが「正義」なのだという発言に感動しました。「ジェンダー平等」とは、女性が政治や社会を動かす主体になることであり、生活者の立場から平和をつくる主人公になる道です。それには女性が自分で考え、協力しあつて行動しなくてはならない、とらいてうは訴えました。今年15年目を迎えるらいてうの家を「平和・協同・自然のひろば」と名づけたゆえんです。ここを拠点に、らいてうとともに歩いていきましよう。

第21回通常総会のご案内

日時 2020年5月30日(土) 13時半開会
会場 エデユカス東京 地下会議室
議題 ①19年度事業報告と決算報告
②20年度事業計画(案)と予算(案)
③新役員選出 ④その他

らいてうの家オープン 4月25日(土)

大和田葉子さんのフルートコンサート

春の茶席

森のめぐみ講座 6月7日(日) 8日(月)

らいてうの家の周りの木々と植生を学ぶ

菅平高原で植栽観察

らいてう忌 6月21日(日) 成城学園前駅13時集合

らいてうが暮らした成城の町を散策します。

日程は変更するかもしれません。
会のHPで確認してください。

らいてうの戦後日記を読む会



『紀要第12号』に掲載された、らいてうの戦後日記（'53'58）を読む会は、2月22日、らいてうの会の事務所でおこなわれ11人が参加しました。

「世界連邦」と「世界平和アピール七人委員会」の活動は、日記では詳しい一方、自伝には若干の記述があるのみなど、米田佐代子会長が詳しいレジュメをもとに報告し、感想を述べ合いました。

らいてうが日記を書くのは極めて珍しく断続的なながらも、これほどの期間にわたって書き続けた背景には、日本の再軍備の動きへの危機感があるだろう。日本国憲法は「非武装・非交戦」を規定しているのに、そうではない方向へ行く。湯川秀樹らの「核なき世界」に共鳴し、「侵略した側の国」の人間としての問題意識も抱えていた、など

のお話には、なるほどと思いました。

この日記には、「こう考えたから」「このような経過で」などが省かれる傾向があります。「『ただ一つ、戦争だけが敵』と思うらいてうは、考え方の違いはあっても『平和』で一致するなら一緒にと考え、自らの考えは書かずに自分の胸にしまっていたのではないか」と考えられると。

「仏教、キリスト教、あなない教などの接近は聞いたことがあるが、戦後日記では神道やユダヤ教の記載があり驚いた」との感想には、「らいてうは、特定の宗教を持っていたわけではなく、人間の命も自然界にあるもの、生活の中に神様がいるという考え方だった」とのことでした。また、孫のために玩具を買い求める、外食を楽しむといった記載もあり、「私たちと同じように生活している」人間味あふれる人だったことがうかがえました。

読む会には、らいてうの孫、奥村直史さんと妻の洋さんが参加され、さまざまな「証言」をされ、興味深いひとときとなりました。（久野泉）

らいてうの家修繕・木の伐採

ご寄付総額 274万5136円に

目標金額を上回るご協力ありがとうございました。台風等に備える木の伐採は3月末から4月の予定です。大修繕を終えたららいてうの家へぜひおいでになり、新しい熊のオブジェに会ってください。

新婦人協会発足100年記念のつどいを

振り返って

— 寄せられた感想から —

昨年11月、東京・四ツ谷の主婦会館・奥むめお記念ホールを133人の参加者でいっぱいにした「つどい」には、さまざまな感想や意見が寄せられました。

*

全体として「100年前の動きを知り感動した」「このような企画に敬服、感謝している」「現在への連続性を感じる」「今後の運動に生かしていきたい」などの声が多く、100年前の運動を記念し現代に引き継ぐという企画の趣旨が参加者に受け止められたことがわかります。

基調報告は「整理されてわかりやすかった」という感想が多数で、まずはこの運動の内容をきちんと伝えよう、という目的はしっかり果たされたといえましょう。

孫世代4人のトークはそれぞれ様々な受け止めがされ、「もっと聞きたかった」も多く、個性豊かな多面的なトークがいろいろな角度から参加者の胸に響いたことを実感します。詳しい発言内容は『紀要第13号』に掲載されますので、ご期待ください。

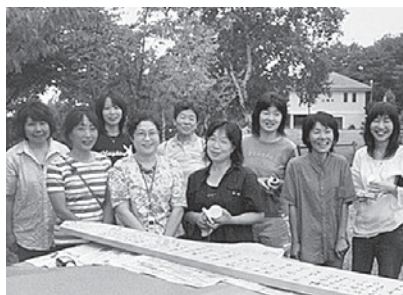
そのうえで、「歴史的事実を今の運動につなげたい思いはわかるが、難しいと思う」「女性の運動が侵略戦争に反対できなかった



2012年撮影

動の進め方をアドバイスされ、更に地元
の建築士が一番望ましい

恩師のような方だったと、いただいた絵葉書を眺めながら改めて思っています。
2004年らいてうの家の建設が決まり、設計も永橋さんの「中央設計」が引き受けてくださるという事になりました。地元の要望や考えを聞く為に真田にいられた時が、私が初めて永橋さんにお会いした時でした。穏やかに微笑みかけながら

いただいたお手紙に同封された
女性建築士9人衆の写真

永橋さんが亡くなったと事務局の金輪さんから知らされた瞬間、強烈な喪失感と悲しみが襲ってきました。もとお話を聞きしたかった。私にとって建築だけでなく人生の

し、女性ならもつと素晴らしいと提案されました。たまたま地元建築士会会員の私がいた事で、地元の女性建築士9人衆の出番となったのでした。当初は別々の事務所の9人での設計業務は未知のもので不安だらけでありました。

しかし、永橋さんという素晴らしいコンダクターがいつも見守って下さり、適切なアドバイスを下さったお蔭でらいてうの家が完成できました。ワークショップを何度も開いて全国の会員の皆さんのご意見をお聞きし、本当に皆の力で作り上げたと感じて頂けるようになりました。永橋さんだからこそその提案です。完成後も手助けを惜しまず長野に駆け付けて下さいました。それ故に、らいてうの家は永橋さんの作品でもあります。

建築をこよなく愛し、地域を愛し、そこで暮らす人々を愛し、そして何よりも奥様とご家族を愛し尊敬された素晴らしい方でした。素晴らしい出会いをありがとうございました。

永橋為成さんを偲んで

平塚らいてうの会理事 小林典子



永橋さんのお手紙にはいつも絵が添えられていました。



苦い経験を戦後の運動にどう生かすか」「運動の世代継承が大きな課題」などの指摘もありました。

つどいの趣旨は、100年前の女性の権利獲得運動をどう受けつぐかを参加者それぞれが考えようということでしたが、それでは物足りず、「行動提起や課題の確認は?」「次の開催は?」という声も。「これからの社会を見据えた社会運動のあり方の提起に興味を持った」「ネットワークづくりが重要」「世代交代が課題、今の若者に変化を感じる」などのさまざまな感想の中に今後の運動へのヒントが隠されているようです。

*

この企画は、昨年4月、平塚らいてうの会が「100年記念」のイベント開催を関係団体によびかけたことからスタート。市川房枝記念会女性と政治センター、主婦連合会、主婦会館、賀川ハル研究会とらいてうの会で5月末に実行委員会を結成し、5団体の共催で11月24日のつどいを成功させたものです。

協会発足から100年を経た現在、5団体の活動の歴史や方向性は様々ですが、実行委員会では、女性の権利を守るための共同行動という一致点を確認し、協力してつどいを準備するなかで相互理解を深め、多くのことを学びました。これもまた、今後の運動や共同行動の発展につながる大きな収穫だったと思います。

(つどい実行委員 堀江ゆり)

シリーズ「新婦人協会の人ひと」



坂本 真琴

らいてうは新婦人協会の発足を発表したあと、青鞥社員で会の中心となって終始一貫活動したのは坂本真琴だけだった。

真琴は1889（明治22）年静岡県三島町（現三島市）で、高田常三郎、みよの長女として生まれた。しかし翌年両親は協議離婚、父は再婚し弟妹6人が生まれている。1893年ころ一家は横浜に移住し、父はキリスト教に入信、もともと画家志望だった彼はいわゆる「輸出画家」として活躍した。

真琴はミッションスクールの共立女学校（現、横浜共立学園）に学び、英語力を身につけた。卒業後は英文速記や英文タイピストとして働いている。偶然のきっかけで出会った坂本勇吉とは、クリスチャンであること、トルストイ主義などで意気投合したが、父が許さず家出して生活をとにした。

1913年の青鞥社講演会に出席したのち、真琴は青鞥社に入社、「野母」の筆名で翻訳を載せている。家出から四年目に婚姻届を提出、子どもは瑞江、龍江、浩江、静江、緑江の五子を儲けている。勇吉の勤務先ドイツ染料輸入の会社が倒産

し、彼は染料専門の坂本勇吉商店を開業、真琴は浩江出産後、家で出来る仕事として染色家をめざした。

1920年3月28日の新婦人協会発会式で、真琴は開会の辞を述べ、評議員に選出され、翌年には理事となる。真琴は活動に参加するのみでなく、機関誌『女性同盟』に「染料専門 坂本勇吉商店」や「染物講習会 坂本真琴研究所」などの広告をだして資金面でも会を支援した。

市川が渡米し、らいてうが体調不良で転地し、会は厳しい状況になったが、真琴は自宅に事務所を置き、会務を引き受けた。1921年2月、真琴と奥むめおは前議会で反対演説をした藤村貴族院議員の自宅を訪問し、治安警察法改正案への理解を求めた。3月からの議会への対応は、真琴のほか児玉真子、衆樹安子の三人だった。3月25日深夜11時40分、治警法第五条第二項改正案が貴族院で可決された。

新婦人協会解散後は、関東大震災の救護活動の中で結成された東京連合婦人会に参加、ついで婦人参政権獲得同盟会（婦選獲得同盟）にも加わり活躍する。一方、染色家としても農閑期の農村を回り講習会を開催、そこで農村女性に婦選の話などをした。

戦後は、初の総選挙に立候補した久布白落実の選挙事務長をつとめたが、その後は社会的な活動から離れ、スケッチやデッサンなど若いときから好きだった絵画の世界に戻り、奥村博史などとも交流した。1954年7月15日死去。

（折井美耶子）

訃報

平塚らいてうの会設立当初の副会長を務めた守谷武子さんが12月10日逝去されました。新婦人、婦団連で平和・女性運動を推進し活躍されました。謹んでご冥福をお祈りいたします。

【事務局日誌】

- 1月9日 資料整理
- 1月16日 第5回理事会
- 2月4日 資料整理
- 2月13日 第4回常任理事会
- 2月22日 りいてうの戦後日記を読む会
- 2月25日 資料整理
- 2月29日 第15回平塚らいてう賞贈賞式に出席（日本女子大）
- 3月12日 第6回理事会（上田市民プラザ・ゆう）
- コロナ感染症の影響で中止
- 3月17・30日 資料整理

小森陽一さん同行信州の旅

9月26日～28日

- 26日 松本猛さんと対談（ちひろ美術館）
- 27日 りいてうの会主催 小森陽一講演会（上田市民中央公民館）
- 28日 午前中 りいてうの家でゆっくりと過ごしていただきます。
- 午後 窪島誠一郎さんと対談（無言館）
- 問い合わせ、申し込みは たびせん・つなぐへ

（03・5577・6300）